

嵯山逸話
全

116

160

019384-000-6

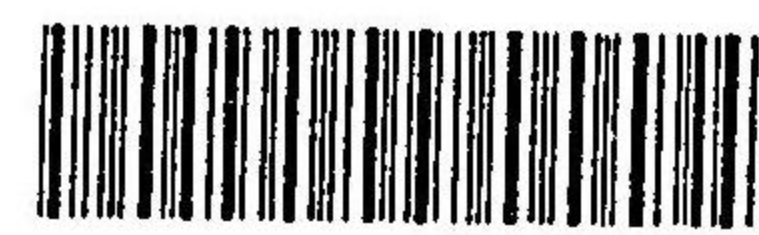
116-160

嵯山逸話

深山 一郎/編

M34.11

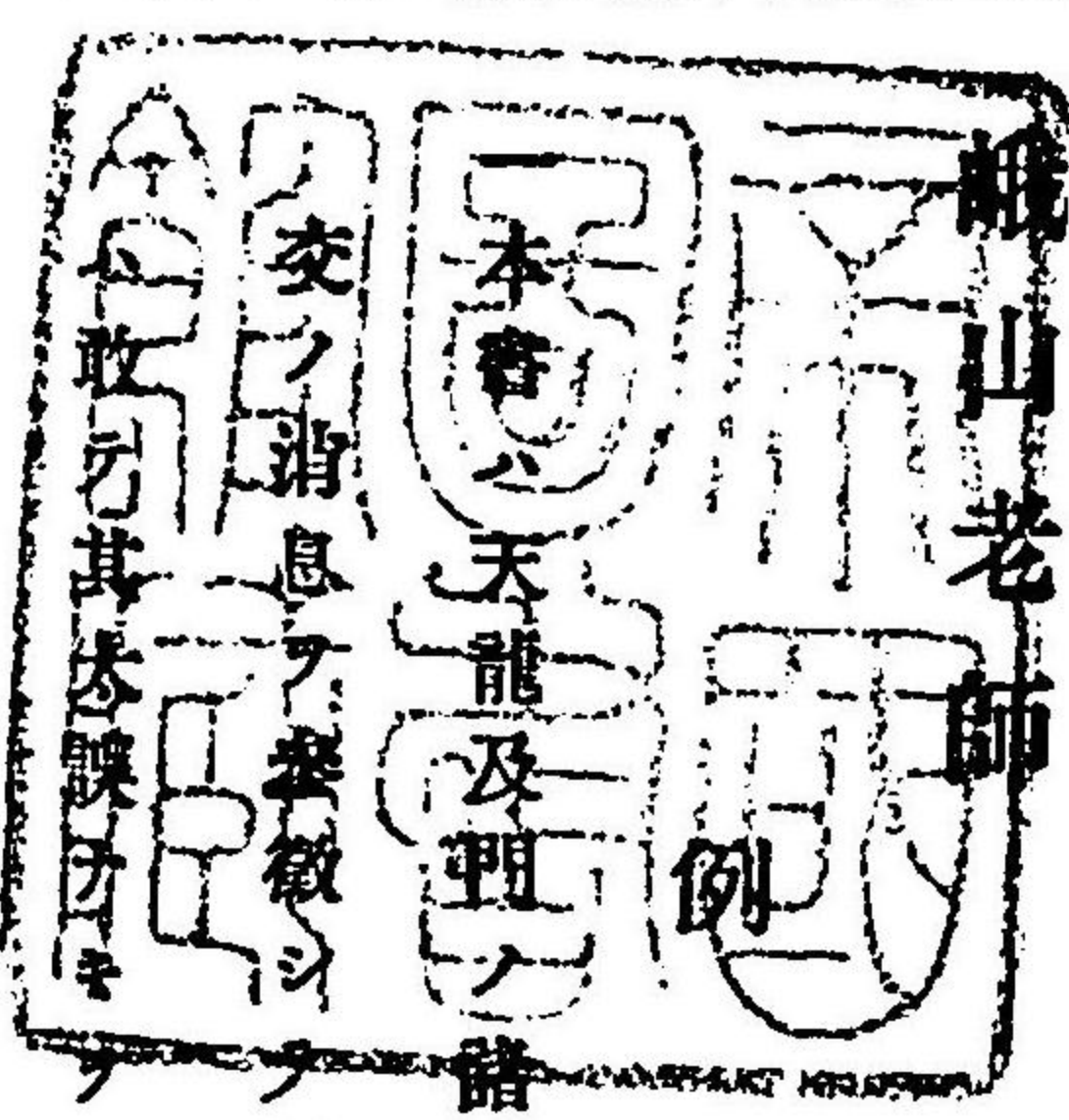
ABG-0084



峩山逸話

漢道景素取去巨喉之白雲
 可復集多收在信考不勤也
 自甘子生書好基

志信 包封四目



言



諸子ガ老師ニ親炙シテ見聞記識セシ事實ニ據リ旁ラ四方道
 交ノ消息ヲ發見シテ編纂シタルモノニ係リ老師ノ本領特色ヲ發揮スルニ於テ
 庶幾セリ

- 一 老師ノ垂示談片ハ殊ニ其氣機ノ天真ヲ寫スヲ期シ俗言放辭モ勉メテ原調ヲ存
 ス道交消息ノ紀聞筆錄ノ如キ得ルニ隨ツテ合纂スルモノ亦多クハ原文ニ隨ヒ
- 一 章句ノ爲ニ實際ヲ失フコトヲ避ケタリ讀者文体ノ一定セザルヲ恕セヨ
- 一 老師ノ學道風格ハ其在時ヨリシテ世既ニ定評アリ隨ツテ師ノ言行ノ新聞雜誌
 等ニ依リテ社會ニ公表セラレタルモノ固ヨリ少ナカラズ本書ノ編纂亦必ズシ
 モ事實ノ重複ヲ避ケザル所アリ讀者新陳ヲ問ハズシテ可也
- 一 老師ノ言行批判并ニ元ト順次ナクンバアラズ而カモ本書ハ得ルニ隨ツテ其材

料ヲ編纂セルガ故ニ時序年度ニ於テ前後ノ顛倒多シ管長時代ノ談ニ繼グニ沙
彌時代ノ事ヲ以テスルガ如キ讀者幸ニ寛假シテ他日ノ大成ニ待タムコトヲ

峨山老師畧傳

師は孝明天皇の即位第七年嘉永癸丑之歲を以て平安城下に生
る俗姓橋本氏其家は下京烏丸四條下る町に處り酒舗を以て業
とす師幼時岩倉の郷城守氏に哺乳五歲にして鹿王院に入り義
堂和尚を師とす即ち入道の太初なり
はじめ橋本氏の室孕むや其の男子たらば僧侶となすべきを豫
期す蓋し洛陽の俗丑年の生兒は家に置かざるの風習あればあ
り師鹿王院に在りて時に生家に往くも母氏嚴正俗戯を許さゞ
るを以て漸く生家を厭ひ専ら學に就く良母外に戒め大徳内に
教えて師の法器日に月に進み年と共に長ぜしかり
元治甲子の歲薩長の兵京阪を騷がし本山天龍寺亦兵燹の厄に
罹る鹿王院義堂嫌疑を以て召され大衆逃散す師時に十二歳嚴
然院を守り獨り留つて去らず義堂事有らんを危ぶみ叱して去

らしむれども聽かず曰く水火唯和尚に従はんのみと義堂之を
奇とし窃かに大成を期す

今上天皇の即位二年義堂和尚遷化師時に歳十六悼傷感憤其恩
に報んとを欲す翌明治己巳乃ち鹿王院を辭し濃州正眼寺に詣
り泰龍和尚に師事し刻苦砥厲辛酸具さに嘗むると前後十有一
年にして又鹿王に歸院す學道日に高し時に滴水和尚天龍寺に
在り師又和尚に就て參道益々勉む

此時に當りて鹿王峨山の德聲漸く大方に傳はり桑門志學の輩、
遠近道を求めて來り參する者多し師皆容れずして曰く法を問ん
とする者は去つて天龍に行け、さらば東福、妙心、建仁、相國等に
行け皆各巨匠の存するあり未だ吾衲が法を説くの時に非るな
りと謙遜自ら持して先德を推進する概ね斯の如しと云ふ
師二十八歳を以て美濃より鹿王に歸院し精を蓄え素を養ふこ
と十年、其間勤儉用を節して院の頽破を修繕し自ら書を販ぎて

工資を補ふに至る後請せられて攝州南宗寺に住職たり茲に於
て甫て衆に接す時に明治廿四年師の歳三十九あり
師の南宗寺に在るや接衆三年にして又鹿王院住職に復す茲に
於て雲居僧堂を董し學衲常に八九十人、道名隆々として宗風益
々振ふ聲門大族も下りて道を問ふに至り天下又佛日を拜せん
とを望めり

往年滴水和尚の遷化せらるゝや師襲て天龍寺派管長の重職に
當り銳意更振を期し宗風を釐正する所多し朝野有道の士、風を
望んで來り法に歸し信願の力に依るが故に四十年來の宿案た
る天龍寺再建の業も師の手を待て成就するを得たり

于時今上の三十有三年、節晩秋に際し師違例あり九月中旬より
肝臟痛劇、漸く肺炎に及び昂熱四十二度を上下するに至る嗚呼
一代の名德在世僅に是れ四十八年のみ而かも斯の如くにして
遂に危篤を報じ翌月一日の朝、西面北頭して天龍寺僧堂に示寂

す是れ佛日光を失ふ法界の大故なれば遠近の檀信、大小の學徒
報を得て馳せ赴く者、訃を聞て歎き悲む者、堂上堂下一時群を爲
せり

是より先師の濃州に在りて泰龍和尚の遷化せらるゝに會ふや
泣て遺屍を抱き聲涙俱に下る仍て天下の道豪、泰龍の後に於て
其師と仰ぐべき者を數ふ以爲へらく天龍寺滴水に如く者なし
と乃ち泰龍の喪に服すると一年而して後贄を滴水に納れしと
其の道情深篤にして殊に師道を重んぜる概ね是れに類す其他
一代の言行は別に逸話に詳具せるを以て爰に之を略す

峨山逸話

一師一日垂示して曰く、何でも坊主は信心力が大事ぢや、自分の信心力がなくて他
を信じさせようと云ふのは全体無理ぢや、今の政治家だの大臣だのと云ふ人が、
色々に世間で悪口されるのも自分の國家を信じて居らぬからだ、いつでも外國
人の舉動を見ては直にケロつく何をやつても自己の信心力が堅忍不拔でなけ
りや金にケロつく土地にケロつく一生涯蒞蕪の幽靈で暮さねばならぬ人が譽
めやうが誇らうが斯大道に依て此の大信心力を以て修行するのが何より肝要
と思ふから一寸云ふて置く

一往年公認教問題の起るや世論囂然たり、師時に某新聞記者に語りて曰く如何に
時勢が變つてもおれはやはり雲水である宗教は信を以て行はるゝものだから
看板ばかり立派にした所が信が無うては駄目サ
佛教が公認教となつた所が別段異はつたこともあるまい公認教として保護し
てくれと云ふた所が政府も承知すまい
公認教運動の爲に各宗各派の負擔が増すおれは洵に之が氣の毒でならん

夏もあれば冬もあるサ、さう心配したこともなからう昔は渡守(岩頭)して法を説いた人もある維新の時も佛教が潰れると思つた、マア何事をやるにも已れの足許を明かにしてからのことサ

佛は如才無いことをいふて居る波羅門の世には波羅門となつて濟度する馬鹿の世には馬鹿となつて濟度する雲水のおれが公認教運動に與するの馬鹿の附合サ

日本は佛教で固めたのである維新の時佛教に代る道を立てずして潰さうとしたから堪らん人間が輕薄になつてしまつて今の世は肺病患者のやうなものである、モツと悪くなりさうだ

寺の住職が檀家の信を固ふさへして置けば耶蘇教などは少しも恐るゝに足らん政府の厄介になつて耶蘇教を防かうといふは實に意氣地のない話である、ナソ立派に口を利いても家族に善く云はれん奴はまづ駄目サ、おれは實業家だ弟子を育て、善い品物を作るのサ、名僧智識さへ養成して置けば何事が出来て來ようとも恐るゝことは少しもない

天龍寺を再建するに三年かゝつた、おれは川田(日本銀行總裁)にさう云つた再建工事には雲水を一人も使用することはならん、天龍寺を再建しても焼ける時に

は明日でも焼ける小僧一人でも後には天龍寺の二つや三つは尻からヒリだすやうな名僧智識と成るかもしれん、又他より弟子を預つて居れど人夫に使用するやうにと預つては居らんと之を後で品川さんに話したら其れは能くいはいれた能くいはいれたといふた

富士山はマツと高いから誰が見ても實に感心する

一師一日平生の木綿衣のまゝ、曹源池のはどりを經行せられけるに偶々十一二才の丁稚主人の伴をして參詣の次で庭園を見廻りつゝ、ありしが、チヨコと師の側に馳せ寄り「オイ坊さん此池に居る魚一匹おくれんか」師頭を横に振つて曰く「いやいや叱かられるぞよ丁稚曰くナント云つて……おまへが生臭坊主の親方だらうと師後ち侍者に語つて曰く「何んば威張つても無我には勝てぬぞ

一師一日舊約全書山上の垂訓を繙き明日の事を思ひ慮ふなかれ明日は明日の事を思ひわづらへ一日の苦勞は一日にて足れりとの語を稱して曰く是れ實に至人の語なりと讀んでわれ爾曹に告げんソロモンの榮華の極の時だにも其装この花野の百合花の一にも及ばざりきに至りて覺へず手を拍つて曰く「えらいやつちやと學者を戒めて妄りに基督教を議するなからしむ時偶々同志社卒業生某來り參じて所見を呈す語未だ斷ざるに一棒を與へて曰くこの馬鹿野郎奴山

上の垂訓を讀んだ程の者がこの惡臭氣を放つて山僧の棒を喫するとは何たる
ウツケ者ぞ、シツカリ山上の垂訓を讀んで來いと某叩頭して辭す

一僧某一日師に見へて曰く私の如き者が修行したら越山や鐵牛の如き者になつて却つて大法に削をつける様なことになりますから私はモウ禪道修行は止めるつもりで御座りますと師叱笑して曰く貴様等が百年修行して婆羅助三昧でトンボリがへりの土佐踊りしても此の大法には小刀削も付くものかい

一師一日客に語て曰く此頃大坂の或學校で親父と師匠と一時に水に溺れて將に死せんとして居る其時は何れを先に上げるかといふ問題が出て生徒も答へに苦しんだと云ふことだ之はナカ〜大切なことで人としては尤も氣を付けて置かねばならん斯う云ふ急場に臨むと大抵の人は麻胡ついでウロタへまはり遂には自分も一處に死んで仕舞ふ夫れでは全く犬死だ斯う云ふ場合には一分間も猶豫は出來ぬ親だの師だのと擇ぶ間はない飛込み次第自分の近い者から救上げるのだ其れで一人なりとも助けることが出来る親だの師だのと云ふて居れば二人共に死んでしまふ……ウムそれで人倫に忤ることはない

一會て非地租増徴大會の京都に催さるゝや三浦中將も亦之に臨み會了りたる後十數名の政客を集め師を請して法話を乞ふ師曰く昔或人が轉宅をして鍋や釜

や火鉢などは持て行たが肝心の熨を忘れたと云ふ話がある熨位ならまだよいが今の人は我れながら我心を忘れてさわざまはる奴が多いと

一師(鹿王にありし時)は外行總て頭陀袋に網代笠を具ふ一日建仁寺にて各山管長會議あり同夜妙心寺派執事前田誠節偶々門前に出逢ひ乃ち擲擲すらく禪兄貴公も好い加減に雲水の足を洗へ時世を知らぬも程があるワと師呵々大笑して曰く時世が時世だから網代笠に頭陀袋でやるわい貴公こそ時世を知らぬのだ右の手に蝙蝠傘左の手にカバンそんな不自由なへドろい事ぢや甘い事はないぞ己れは人が何か遣らうと云へばオイしよと云ふ安排で兩手をズツと出すが貴公のやうぢや鼻ふく事も出來まい

一師美濃正眼寺にありし時或山中に一茅庵あり雨漏り椽朽ちて狐狸の窟となりけるがいつしか乞食共の探知する所となり數十の乞食群をなして宿す師制間毎に必らず其群に投じて接心すること一週間乃至三週間なりきと師後ち人に語りて曰く己れが乞食の宿を借りて接心をしたことがあつたが乞食とてナカ〜馬鹿にされぬ鍋や釜や時々借りて粥をたきしに不足な面もせずサツサと貸して呉れた又其中に一人悪いやつがあつて時々同輩の物を盗む其れに己れの物は一度も盗んだことはなかつた何でもコチラ次第で敵はないものサ

一星亨一日師に謁し頻りに政治社會の腐敗を説く師巨眼一瞥して曰く腐敗々々と之を腐らす者は誰だ

一會下の僧某法類檀徒の懇請に依つて轉位をなし披露の爲め一日相見を乞ふ師乃ち垂示して曰く今は妙な時節になつた法類の和尚始め檀徒のものから妻を娶れ魚を喰へと勤めるので偶々堅固な者も寺を持つと三年経ぬ内に魔道へ這入つて仕舞ふからなア……どうか百日の辛苦も屁一つで化ける様な事をして呉れるなよ今の世では肉食妻帯さへ慎んで居れば學問も坐禪もいらぬ有様だ徳川時代よりは餘程坊主がシツかりすればするほど仕事が出来からなア政府の力を頼まんでも法道の行はれることは今の方が仕よい仕にくければ其人の信念が薄弱なのだ

一師一夕鹿王院より歸途梅井某を訪はる某偶々不在因て確夫をして歸を促がさしむ夫夜已に更け米未だ精しからざるを以て固くこれを辭す師叱して曰く明日でよければ今とは云はぬわい夫否むに由なくして出づ師乃ち侍者に向つて曰くあれもなア雇はれて搗いて居る者だから無駄に使つてはすまぬ汝もこいと裳をかゝげ法衣を結びて自ら碓房に入り汗を流して米を搗きしと

一松方伯曾て總理大臣たりし時京都に入る天台座主村田寂順來り訪ひ談偶々宗

教界の道德に及ぶ寂順乃ち説て曰く近來社會一般道德の地に墜ちしは全く我が佛教の振はざるによる政府を首めとして佛教を尊崇し且つ之を保護せば道德の回復期して埃つべきなり乞ふ閣下能く之を扶樹せよと師時に傍に在り語未だ終らざるに憤慨一番して曰くこれは以ての外の事だ吾が佛法は他の干渉を受ける必要はない如何はと衰へたりとも政府の力は少しも請はぬと又伯を顧みて曰く政府は不如法の坊主共を片つばしから縛りあげてドン／＼生首を引抜かれよ其餘の御世話は一切御無用だと一座爲に肅然たり伯後ち人に語りて曰く巖山々々と八釜敷云ふが成程無理はない眞に佛教の泰斗である

一師一日東本願寺の嵐山別荘に郡長某等と招かる法主晚餐の饗を設け待遇太だ至る宴酣なるに及んで法主先づ杯を薦む師頭を横に振つて曰く腥い口で呑んだ杯はいやだと法主乃ち洗つて之を薦む師受て傾むくこと數杯宴了りて庭外に散歩す時に郡長師の面を窺ひ席上の美人如何思召すと師曰く其れだから郡長の上に管長がいるのぢや

一客あり師に謂て曰く天龍寺再建の事久しく之を聞く而して成らざること亦久し老師出で玉ふに及んで忽ち竣功を告ぐ誠に高德の致す所なりと師曰く否な否な是は予の徳にあらず耐なりと客怪んで其所以を問ふ師笑て曰く已れが小

供の時義堂に付て鹿王に居たが和尚は中々意地くねが悪い平素それが恐はく
てならん偶々天龍寺がスハ火事と云ふので下僕等を引連れて早速行て仕舞つ
た吾れは此時こそと思ひ和尚の居間から砂糖桶を擔ぎ出し水甕にぶち込んで
釜の中でしたゝか呑んで心地好げに火事を見て居た今は其罰で此仕末サ

一師一日垂示して曰く殺生々々と戒法家は八釜敷云ふが殺生も段々ある時間を
無駄に過すは時間を殺す金錢を無駄に費すは金錢を殺す其れだけの力もなく
て大臣の位に居るは政治を殺すのちや會得もせず禪道家ふるは佛法を殺す
のちや今の様子では坊主は大かた佛法を殺しにかゝつて居る政治家は日本の
國家を殺し通しちや斯うも揃うて殺生好きでは佛法と國家は體なしちや何で
も水一杯遣うて捨るにも活して捨てるのが活佛法の殺生戒を持つといふもの
ちや護生須是殺殺盡始安居などの言句を取違へまいぞや

一師一日侍者を伴ふて山行す侍者行々笹の穂を抜き之を噛んで捨つ師願みて曰
く他日人天の師となる者は常に徳を慎まねばならぬ己れは道を歩くにも傍の
草を踏まぬやうに山坂を登るにも木の葉一つ無駄に取た事はない越溪和尚は
婆羅助であつたが微細な處に氣をつけて少しも不陰徳はせられなんだ
一師一日揮毫せらる側らに人あり曰く老師の書風は鐵舟に能く似て御いでます

なア師笑つて曰く馬鹿云へ鐵舟が己れに似て居るのだ又曰くせうか天龍巖山
と落款を願ひとう御座りますさうか巖山の天龍かと思つたら天龍の巖山か

一公認教問題鼎沸の時師一日品川子を尊讓堂に訪ふ座に内務書記官某あり品川
子に向て曰く此頃の坊さんは實に困る……ア、してくれいコウしてくれい、
それでは不利益これでは損だと是も非もなしに政府の力を貸して呉れいと泣
き付て五月蠅てたまらん道徳だの品行だのと云ふ事は夢にも知らんと師黙々
愚の如くにして歸り講座の次を以て切齒説て曰くせうも當時の坊主は見識の
ないのも程がある何でもないことを直に政府の力を借りやうと泣き付て東京
まで耻さらしに行く其れよりは一層堪でも持つて魚でも食つて寺へスツこん
で居ればよいに實にタマらん法律でもなかつたら片つばしからドシ〜握み
殺してやつてもまだ足らんと師常に人に語て曰く新聞などに坊主の醜聞が出
たり道路に坊主の汚行を見ると耻かしくて消えたくなると

一會下の僧某滴水先師遷化の時典座の役に配せらる依て師に謁して曰く都合が
あれば據る御座りませぬが何卒因縁の爲め靈龜を昇して下されたしと師涙を
浮へて曰くお前たちが心を合してさういふ道情の厚い心掛で居てくれるから
隠居もさぞ定中で喜んで御座らう然しなアこう云ふゴテつく時は誰でも遺骸

のそばへばかり寄りたがるが……心ある者は人の目立ぬ處で萬端の都合を運んで呉れるが又大事な報恩だマア役位の人にも相談はして置かうが

一居士某一日師に見へ問て曰く
悟道は最初の關門を透破するが甚だ肝要なりと承れり其關門を透破するには大河の水の如く如何なる巨岩大石も避くることなくして之を透破すべきや又た如何にと師答へて曰く如何なる巨岩大石もドン／＼とぶち當つて透過すべし躊躇して居ては駄目だ

問て曰く如何なる水といへどもぶち當つて透過せば太だ傷ふにあらずや
師答て曰くぶち當つて傷ふ水ならば其れは忘心なり
問て曰く然らば如何せば其關門を透破し得べきや
師答て曰く突貫に及ぶ者は世界にないサ

一僧某大聲不入里耳てふ語の染筆を請ふ師笑て曰く山家村里の權兵衛八兵衛を相手に大きな爐側で薩摩芋食ひながら番茶でも呑んで皮骨をこねても分るまいからなア

一師南宗寺に在りし時雨なきこと殆んど月餘農家大に苦しむ師其苦心を察し大衆を召し鎮守辨財天を請して請雨祈禱の爲め一週間の接心を爲さしむ期已に

満ち而も一滴の雨だになし乃ち陸座垂示して曰く自ら固く信じて真心一片でやればドレほどの旱天でも一滴の雨も降らぬと云ふ譯はない汝等が……ド
睡りして居るから降る筈の雨も降らぬのだと更に三日間の接心を命じサア是から三日間だ逆立になつて居た所が知れたものだ……何も衆生濟度を皆一生懸命に折骨るがよいそれで雨が降らなんだら辨天を引きすり下して粉葉微塵に踏み碎てやると衆皆感激日夜を分たず刻苦す果せるかな三日ならずして大雨盆を覆すが如くなりきと

一客某一日師に謁して曰く内地雜居も目前に迫りまして政府は無論宗教家も夫々準備に忙はし或人の如きは佛教を以て國教とせんと運動して居るさうですが師は如何で御座りますと師曰く内地雜居か此れは宗教家は宗教家大臣は大臣で名々吾腕を磨く好き機會だ世間では準備だの何だのと云て騒ぎ廻はるが其れは大間違ひだ嫌をもち肉を喰ひ我儘勝手をして國教運動だの教會組織だのと表面ばかりやつて何が出来るものか却つて大法に創をつける宗教家は宗教家の作法を堅く守つて法道を修して行けば何の世でも法道の行はれぬ筈はない宗教家が皆名々にさうやつて行けば百萬の耶蘇が脊揃ひで來たとてビクともすることはない

一師は他より歸り玉ふも自ら下駄等を收めて侍僧をして更に開からしめ玉はざりし或人師に向ひ貴僧は管長の貴き身にありながら何故に履物を手づから收め給ふやと問ひければ師は呵々と打笑ひ雲水は吾れよりも勝れた者にしてやりたいから履物なぞ片付けさせてはならぬと答へられた

一師は最も嚴莊なる法要の外紫衣を着し玉はず平素は無論大抵は麻の衣のみなりしが大坂の豪商某一日師に向ひ老師のやうに乞食坊主みたやうな風躰をして出入されては近所に對して面目ない今後は稍や美なる衣を召されたしと云ひければ師曰く己れは貧乏で衣もない某曰くさらば喜捨申さん幾何金を要するや師曰くさうさ二十圓もあればよからうか然らば唯今差上申さんと起ち上がるを押し止めマア又のたびにして呉れいと此の如くして受けざることを數回後止むなく之を受け歸へりて副司に命じ其金を以て隠寮の側に井を穿たしむ後某來り法衣成れりやと問ふ師散步せんとて某を井の傍に伴ひ此間貰つた金はこゝに落してノウと

一天龍寺の兵燹に罹るや師の本師なる義堂和尚其燒跡に一茅庵を結び臘入接心中獨り懺法會を修す時に師年甫めて十二一日講後和尚の袈裟を取むるの次いで壁上に掛くる所の出山佛の圖を仰き笑つて曰く道は狩野永樂の筆なるが筆

數多くして太だ佳ならずと語未だ終らざるに和尚大喝一聲それは貴様の口數が多いのだと師大いに感じ爾來復た多く語らず

一師一日垂示して曰く何をやるにもセカクして早く効果を食るまいぞ弓を射るのに的へ當てる事のみ樂みとしては十本が九本まで好しの中しても但其れは當るのだ先づ体を極めて充分に弓を引きしぼると的が矢の先へヒツつく様になる此境界にならねば何をやつても駄目禪宗坊主の仕事は又格別だ早く修行して人に譽められよう早く人に用ひられようと云ふやうな淺慕な願心ではよしゑらい者になつた處が御悟りの押賣でもするか馬ぢや馬ぢやで人を虚喝する馬方知識にはか成れぬぞ

一師一日垂示して曰く皆も承知の通り當山も愈々再建に着手する事だが山内の和尚方もお前方に勸化して貰いたいとか土を運んだり石を曳たり萬事頼みたいと云はれたから其れは御斷りだ己れが處に掛錫して居る坊さんは普請勸化の修行に來て居るのではない此末法惡世の時では其んな氣長な事を云ては居られぬから大衆には座禪三昧にして其かはり此叢山が勸化に行つたり人足の手傳をしたり八十人に代て勞働を引受けると云つて斷つて置いたから何でも其つもありで骨折るがよい何んば立派に本堂が出來てもよい坊さんが出來にや

駄目だ此普請が成就するとせぬとはお前方の刻苦辨道にあるのだ決して巖山がゑらいのぢやない巖山々々と云ふのも皆お前方の事ぢや

一僧某住職たらんとして道場を辭す師之を誠めて曰くお前も寺持ちか何でもシツかりやるがよい近い中に住職規約と云ふのを製へて妻妾を持つたり魚肉を食つたりする不行跡の奴はドシ〜た〜き出して伽藍がドウだの經濟がコウだのと小面倒な寺は打毀して焚て仕舞てドウか本當の坊さんを拵らへたいと思ふから承知して置くがよい……………ハイなんでも身体が大事だ

一日耶蘇教家某師を訪ひ頻りに教法改進の説を述べ以て佛教の守株を攻撃す師曰くさうさ耶蘇の方は追々賢い人が出て改めて行く已れの方は馬鹿者ばかりで本に返へすことを專一とする大へんな差いだ已れの方は釋迦が一ばん確かでゑらいが耶蘇の方は段々改めるとして見ると根本がナト薄弱と見えるなア某默然として語なかりき

一師の伊深より歸り去つて鹿王院に住するや堂宇頽廢雜草壘をなし殆んど棲栖しがたし師即ち再建を企て百万勸化して資金漸やく集る而も尙は百金を缺く乃ち書肆聖華房を招きて曰く我經藏に入り二種以上ある書籍を選出し來れ一部づゝ賣却し以て再建の資に充てんと聖華房唯々として經藏に入り多時にし

て數十百卷の書を選出し來り師の檢閲を請ふ師曰く一部は必らず殘しあるや曰く然り曰く之にて價幾計ぞ曰く數十金師曰く夫にて汝には損なきや曰く損なし遂に之を賣却して一語の評價に及ばず

一或夜天大に雪降り其翌日乍ちにして快晴、一輪の朝陽輝き昇る乃ち侍者に告げたまはくまア考へて見い世の中の人が少々ばかり人の爲めに仕事をするとか國家に盡したとかいふとアレも吾の發明ぢや是れも己れの盡力ぢやアノ時自分コウしたから今日はドウだのヤレ勳功ヤレ名譽と八釜しい事だがなア小天地とも云ふ人間にしては實に耻かしいことぢやないか此の景色を見いゆふべの内に世界中へ何億萬石とも分らぬ大雪を降らして置てさ此旭の姿はぢやぢや……………そんな事は一向覺へがないといふ鹽梅で素知らぬ顔して今朝は又た世界を照しぬいて居る此れでなくちや大きな仕事は出來ぬぞ

一師一日客と晚餐の次で談偶ま角力の事に及ぶ師笑つて曰く常陸山とか西の海とか今の大關位い負かす事は世話のない事さ客云く一体どうなさいますか師曰く其れは自から倒れてかゝるのだ兎角自分によい顔して居つて人を動かさうと云ふは無理な話しだ

一師の南宗寺に在るや寺門廢頽堂宇洗ふが如し此間唯枯淡を甘んじて接衆是れ

事とす偶々京都竹村某を胃して來り訪ふ師其遠來を喜び今日は堺の珍味で西洋料理をよんで遣らうと云へば某豫て當寺の赤貧を知らせるゆへ是は有難しと打ち笑ふ師先づ侍者に酒肴を命じ自ら兩戸を外づし風呂敷を覆ふて以てテーブルに替へ法堂の腰掛を擔ぎ出して以て椅子となしさア是れで座敷は出來た是から御馳走ぢや第一に焼唐辛第二に醬油に生豆腐其次は隠元豆の合へ物、是が堺の西洋料理ぢやシツかり遣らうと某其の洒落なるを歎こび醉を盡して辭し去れりと

一近年教界太だ多事にして屢々各宗管長會議を洛西妙心寺に開くや師も亦勤めて之に臨まる侍者某一日師に謂て曰く會議などに度々御出席になるのはイケません今日は前止めになりては如何ですと師平然として禪も糞のつき合ひさど云ひつゝ飄然として出づ而して議論百出沸騰鼎の如き時は靜坐瞑目不動山の如くなりき

一侍者一日師の室前なる手水鉢の水を替ふ師傍らにて打ち見やり玉ひしが徐ろに口を開き汝も侍者となりて半夏も經つからモウ氣が付くだらうと思つて居たが言ふて置ぬと生涯知らずに過す物はなア大は大小は小それ〱活して遣はねばならん水を替へる時は元の水ばそこの庭木にかけてやるのさそれ

で木も喜ぶ水も活きたと云ふものだ因地の修行をするものは此こらが要心すべき所だ又洗面の水などもザツと捨てずに遣ふたあまりは竹椽へ流して洗ふのだ……うむ水一滴もそれで死にはせん皆活きて働いたと云ふ者だ陰徳々々と古人方が八釜しく云ふのも外ではないぞ

一師曾て南宗寺に在りし時大坂師團の兵野外演習の爲め同寺を借りて宿舍に充つ師乃ち知客に命じて曰く野外演習は國家萬一事ある時の用意だ非常の艱苦を實踐せしむるのだから彼等を大切にするのは慈悲ではないと知客よく其意を体し兵士は無論將校に至るまで雲袷なみに麥飯に蔬菜を添へて之を供し他は湯茶だに給せざりしかば將官某大に怒り一日無案内にて師の室に闖入して屹然と突立ちたるまゝ我等軍人たる者は身を君國に致し一命を捧げて上は皇室より下萬民に至るまで之を保護するものなりと聲を尖らして詰責す師冷笑一番して曰くそれはお互さまよと將官杜口爲すなくして出づ

一師屢々東本願寺の嵐山別荘に招かる一日北垣男以下紳士等同席たり某郡長師の魚肴を喫せざりしを見て師に向ひ頻りに一休の事を引き悟を開けば魚類を喫しても妨げなしと聞く如何にと師笑て曰く一休は一休の信する所哉山は哉山の信する所で仕方がない

一大工稻垣某神經病に苦み坐禪せんと欲して教を請ふ師曰くお前は色々物事を考へるから其病が起つたのぢや其上に坐禪すると一層悪くなるからマア止めるがよからう……其病には首も手足もふち切つて死んでしまふが第一ぢや見やうとしても目がない歩まうとしても足がない持つにも手がない言ふにも口がない耳も鼻も何んにも仕方がない此處で十分死に切るのさぞすと神經病處か世界、中蟻の鬚一本ない其れから又首も手足も付けたらよい其れこそ真正無病の人ぢや

一明治二十七八年の役會下の宮永大尉出征せんとし來て師に教を請ふ師即ち趙州の無字を授け反覆之を諭す大尉喜んで訣る後臺灣に轉戦せしが匪勢猖獗にして我軍利あらず衆皆退かんとす大尉獨り奮然として曰く鐵砲丸は我よりも速しと遂に奮戦して名譽の戦死を遂ぐ師大尉の訃を聞きて痛悼措かずア、訣の際シツかり云ふてやつたが其れが爲め殺してしまつたと即ち追悼の偈を賦別して黑板に書し之を壁上に掲ぐる累日、偈に曰く

追悼陸軍大尉宮永計太戰死於臺灣

爲君殺自大哉忠、臺北臺南志氣雄、參得趙州無字話、還同天地不言功。

一師伊深に在りしとき龍水、靖州、熊嶽の諸老と共に遠鉢に赴き一日師投宿依頼の

番に當る平然として之を顧みず村外れの古堂に入り大の字になりて午睡す黄昏に及んで諸老空腹をかへ村中を戸毎に問ふ皆存じませんと答ふるのみ已むを得ず村外れに到れば則ち高丘に古堂あり若しやと語らひ之を訪へば師は猶睡中に在りて鼾雷の如し叱呼之を問へば大笑して口吟すらくゆうべきこへねた今宵はこゝに明日は田の中畦まくらと一同啞然たり

一師一日侍者に語りて曰くおれが十八の年伊深で典座の加役に入れられた已れも此山で育てられたのだから威張ることは知つて居ても飯や汁の焚き様は少しも知らなんだ、そこへ先役の因さんと云ふが風を引いて寝込んで居る湯が沸き立つたが何うしますやが煮へたが何うしますと云ふ工合で一々尋ねると因さんは、エー面倒臭い天下の衲僧が麥粥の焚き様も知らぬか馬鹿な男だなアと小言を云ひながら教へて呉れた己れも我慢で三日ばかり獨りでやつて居たが何うも慣れぬ事だから朝は大眾よりも一時間も先に起きて晩までかゝり詰めにしても中々急がしい少しも坐禪だの工夫だのと云ふ餘暇はなかつた或日の晩方因さんが典座寮の障子を開けて禎さん急がしいかなアと云はれて忌々しいから急がしくてたまりませんと云ふと因さんが面らの悪らしい風をして、そ

其翌日から此の無駄をして御座るの一言を以て終始念頭に掛けて仕事をした
其翌日は線香一本座はる暇が出来た今日より明日と段々心掛けて見ると仕事
する間より坐禪する時間が多くなつて来たトウトウ無駄をせまい無駄をせま
いと心掛けて今日までやつて来たなんでも無駄をせん様にやるがよい
一師南宗に在りし時書を裁し諸子に示して曰く

新年の賀瑞目出度

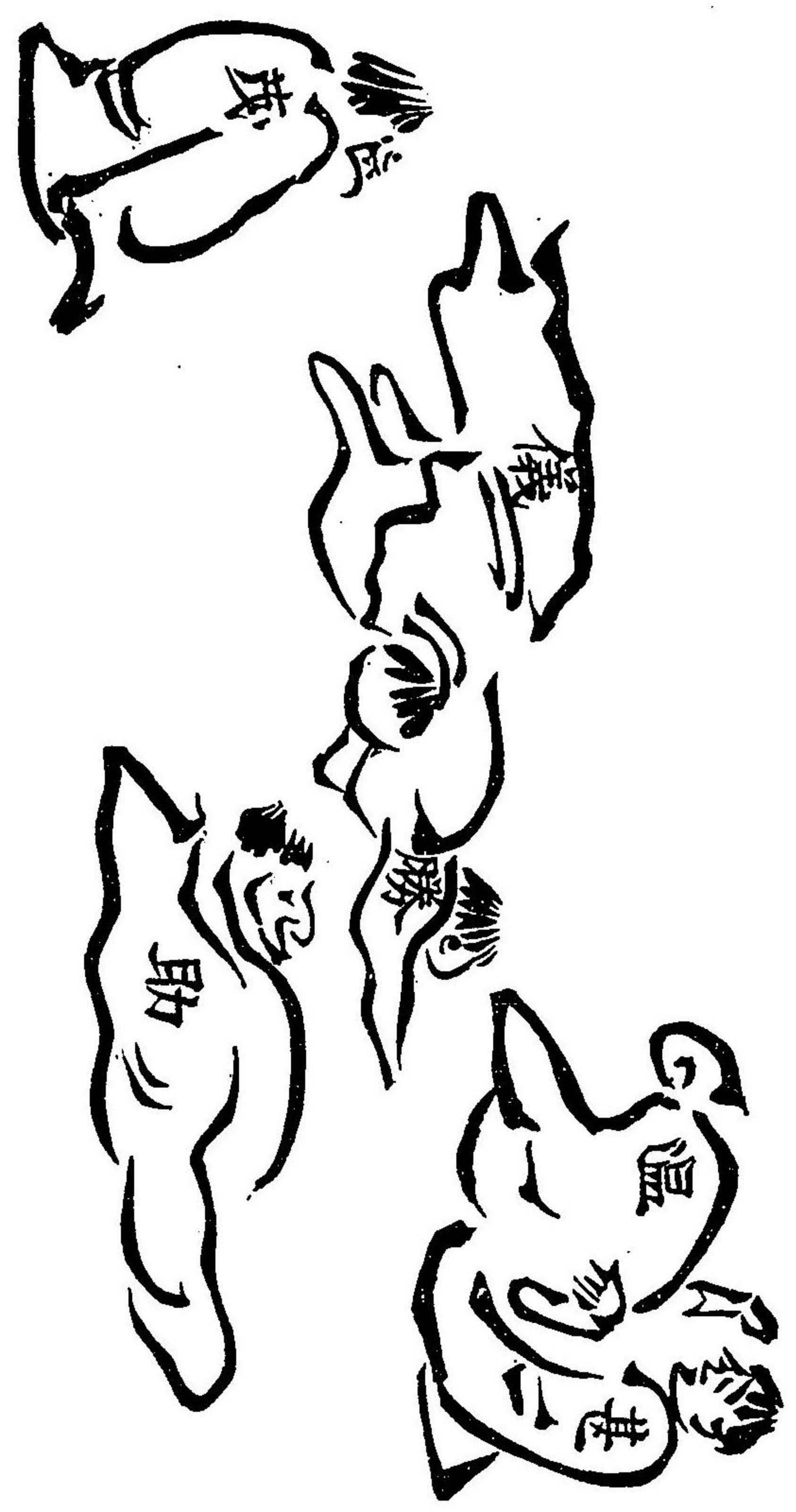
皆々珍重無窮賀詞申上候次ニ野袴も無事ニ加馬齡罷在候間御休神被下先
ハ年始ノ祝誼迄餘ハ追々寒氣ニ相成候間風引カヌ様禱申候早々頓首

二十五年一月一日

息 耕

- 儀 三 郎
- 茂 三 郎
- 助 次 郎 殿
- 勝 之 助
- 甚 之 助

各御兩親前ニ宜敷御一聲被下



温日今日ハ天龍寺カラ僧堂行ニテ一日中走り廻ツタカラ腰ガ痛イ十計リ
打テ吳ンカ
儀三日荷ノ初揚デ肩ハ痛イシ足ハ棒ノ様ニナツタ目ハ眠タシ温サン今夜
ハ休ミマシヤウカ甚サンカワロウカ

茂三曰今日ハ揃ヒガ遅カツタ本ハヤメテ詩ヲ吟ジヤウ又私モ甚サンカワ
ルデ助曰今日ハ濱ノ荷ガ初出ト塞サトデホツコリシタ儀三サン茂三サン
アスノ晩カラ又骨ヲロウカ私モ腰タ、クデ甚曰エへ、ーイッデモ十計リ
ト云テ百モ二百モ打ス腰タ、キニ閉口々々其モ本ノ代リナラマダヨロシ
イ勝ハ高鼻イキデグウ々々……兄サンヲモイ



梅井兩家小澤六人立寄云フ每晚御寺デ本ヲ讀ンデルト思テイタラ本ハ讀
マズ行儀ハワルクロハ只本本ト云フ計リ仕事ハキライ下女下男ヲ使フハ

犬猫シカル様ニ云ヒ親ニハ口ゴタイ着物ハヨゴシホフダイ外カラ歸ルト
上等着ヲアガリ鼻ニヌギツバナシ始末ハワルシ其上シヤツヲ買ヘ時計ヲ
買ヘ錢ハ大地カラ沸ク様ニ思テイル少シハ親ノ思ヲ知リツウナ者古人ノ
本ハ誠ニ悪ルイ者トミエル前ノ峨山ハ本讀メ々々ト私等ノ子供ニ勸メタ
ガ誠ニツマランヲシタアホウ……



親達サン案ヅルナ峨山ハ世界一目ニ見ル眼一ツト云タイガニツ迄持テイ
ルカラ御心配ニハ及バヌ鹿王連鳥渡聞ケ温子モ今カラ人ニ腰ヲ打セテス
ムモノカ人ニ教ユルハ吾學也古人惟道惟勤ト儀三今日ハ休ム明日ハ休ム

何ト云フカ古人モ勤ムル一日ハ貴ブベキ一日ナリ怠ル百年ハ悪ムベキ
百年ナリ

茂三每晚詩ヲ吟シ剩テ往返ノ道中ニ高聲揚ゲテスム者カ道ヲ知ル者ハ
恐ト云フガアル

助イツデモ々々今日ハホツコリアスカラト云古人若イ時ノ辛抱ハ錢ヲダ
シテモセイトアルデハナイカ

勝チツト目ヲ覺マセ其様ニ本ガキライデハ阿坊ニ成ル積リカ古人云賢ヲ
賢トシテ色ニ替ヨトオ釋迦様モ眠ル者ハ蛤ノ生レガワリト呵ツタガア
ル

甚ワツカナ事ニ其八ノ字眉毛ハ何ト云フ事ゾ古人云義ヲ見テセザルハ勇
ナキナリ

皆々ヨク聞ケアノ兩親遠ガ八ノ字眉毛デ云ハレル事一々痛處エ針サス様
ニアラフガ不孝者

イヤ私ハト云譯ヲシテモ天ガ知ツナル其ガウツナラ自分々々ニ腹ノ中ニ
勘考シテミルト覺ガアロウガ此ニ反シ兩親ノ云フ先文ニ記シタ通ヲ好
イ方ニ守ルト實ニ三拜九拜巖山モ堺ノ濱カラ手ヲ合シテオガム左スレバ

今年モ目出度商賣繁昌親達安穩嗟峨モ好クナル鹿王モ好クナル天下泰平
國家安全至祝々々不盡穴賢……………

一臘入接心中僧あり入室す師忽ち大喝一聲このド氣違ひめと言つて惡打二三十
棒遂に室内より蹴り出し北ぐるを追ふて禪堂に至り雷喝して曰くこのド氣違
ひ妨主め打ち出してしまへと翌日講座の次で大衆を睨視し聲を激まして曰く
皆の者がこうやつて修行をするのは我慢を除く爲ぢや其れに參禪に出て来て
我慢で透さうとする奴があるぞればと釋迦や達磨が千匹脊揃ひして來ても我
山はミジとも動くものでない

一星亨一日師に謁し問ふて曰く日本に行はるゝ佛教には各派區々に分れ氷炭相
容れず互に衝突ある如く思はるゝが如何

答ふ大乘と小乗とは互に相容れざれども日本に行はるゝ佛教各宗は小乗なく
して皆大乘なり佛は機に對して法を説かれたるゆへ道に入るの門戸幾箇もあ
り是れ各宗派の分るゝ所以なり修して其奥義に至れば皆同一に歸するものな
れば少しも矛盾する所なし

問ふ大小乗の別を一言に説明すれば如何
答ふ難行苦行を積み己れ獨り悟りて足れりとするを小乗といひ己れ悟りて安

樂を得たる以上は世人にも安樂を與へんと欲して生々世々斯道に従事して自利々他するものを大乘といふ
問ふ佛教は消極的に陥るの傾きあり其所以は寂滅爲樂を目的とするにあらずや

答ふ寂滅爲樂とは四句の偈の末句にて前なる三句に生滅々己とあり問ふ所の寂滅は寂滅にあらずして生滅の滅なり生滅とは雙對の法にて寂滅とは絶對の法なり生と滅との二つが眼中に遮らざるに至り始めて寂滅となる例へば政黨員の眼に當の敵見ゆる間は生滅の位にて眼中己れに對するものなく天下獨舞臺に至り始めて寂滅の位に達するなり人若し修し得て此に達せば眞の大丈夫の働を爲すことを得愉快此上なからん

問ふ即今自身佛門に入るとすれば如何の處より手を下すべきか

答ふ今此の如く問ひ又此の如く答へ座中此の如く聞き居るものあり是れ何物ぞ何は扱置き此の物を知るを以て第一着の急務となす故に先づ己れが心根を明らむるより手を下すべし
問ふ禪師は心を主とすといへども心に善あり惡あり唯々心の命する所に隨ふは危きことなきや

答ふ我宗にて心と指すは本心を云ふなり善あり惡あるが如きは之を意となす此の意は所謂る意馬なり悍馬の如く跳躍するものとす因て本心が此の悍馬を駕御して泛駕の憂なからしむるを本心の働となす世間にては意と心と混雜して異名同物の如く思ふは大なる間違なり今問はるゝ所のものも此の類かと思はる希くば本心を明にして意馬を自由に調御せられんことを望むと

一侍者某佛に獻せんと欲して一日花木の稍や大なるものを折る師是を見て喜ばずして曰く小さいのでよい己れの處には外に咲て居る花が見へぬやうな佛は居んわい

一師虛堂錄提唱の時一日雲岳和尚至上堂の章を拈じて曰く是不臥同床爭知被底穿やだ知音同士は好い者ぢやなア雲岳さんそやとんせんか、そうく昔は御互に骨折る頃は石の上にも三年だ若い時は二度ない志願高大なれば富士山米粒の如しと云ふ勢でやりましたがなア雲岳さん、そうく今の者は法に親切がないから坊さんが皆俗人に御へつをして政府の力を借りたり皇室の御力を借りにや法の爲に盡せぬと云つて自分吾儘一杯をして居ると云ふ有様だが何んとそやとんせんかと一山の大和尚始め八十餘人の雪襦等が日常の弊害を細大洩らさず説きならべてなア雲岳さん、そやとんせんか、そうともそうとも知音と云

ふものは好いものだなア高山流水唱拍相應すると云ふは此處らだなアと其勢
恰も猛虎の嘯くが如く獅子の吼ゆるに似たり一衆目と目を見合すのみ師下座
後侍者に云て曰く何ばう人をいぢめる奴が出来ても口からは税を取られんで
好いのと以來雲祇動止舉措の中に於て清規に違ふものある時は互にそら又
雲岳さんが御座るぞや叱責せられんとする時又雲岳さんと云へば一時の警語
なりし

一師一日出京せんと欲して車を命す車夫與三吉到り待つ時に一頭を負傷鹿龜山
より走り出で本堂を廻ること數回夫棒を提げて之を追ひ大堰川の畔に到りて
遂に之を擒にす師出でんとして夫を召す夫見へず乃ち侍者をして召し來らし
む師曰く何處へいつた夫しかくとなりと答ふ師更に問ふて曰く汝人を乗せ走
るとき復た鹿の出で來るあらば車を捨て之を逐ふかと夫前非を悔ひ深く謝す
師歸來侍者に語つて曰く鹿は我れが殺したのだ與三が居らねば助るのにと乃
ち大衆を召し之が爲めに誦經せしむ

一舉山大衆春秋彼岸を期して柴鉢の爲め大坂に向ふや師は必らず垂示して曰く
何んでも獨りだと事は小さいが禪宗の衣を着て禪宗の飯を食つて居る限りは
一舉手一投足も私に動かす事はならぬ悉く人天の師範となるべき修行者らし

く慎むが大事ぢや又天龍寺は萬代の後まで叢林の名跡を持たねばならぬから
なアに峩山は一代ぢや峩山は焼けば灰ぢやお前らでも其通り一人一人は何で
もない焼けば灰ぢや又不都合があつても獨とすれば輕いが禪宗の天龍僧堂に
居る坊さんがコウであつたと云はれては當僧堂のみならず宗門一般に關係し
て延いて佛教者一般の顔へ泥を塗ると云ふもの又第一佛祖へ對して濟まぬ萬
事如法に修行して行けば識らず知らずと其れが化度になるのぢやから禪宗の
衣を此身に纏ふた限りは決して私しの舉動をしてはならぬ何んでも禪宗の清
規に順うてやると云ふ事が肝要であると

一師一日山縣侯を白日に訪ふ侯曰く宗教はドウも氣に入らぬ事が多い師曰く吾
れは又政治家はドウも氣に入らぬ事が多い侯曰く折角根津中佐の如き役に立
つ男を坐禪なぞさして隠居させると云ふのは大體國家に不忠だ師曰く左様さ
アレも忠義心がなく力の足らぬ癖に金がほしさに大臣になりたがる人への模
範です哩誰が國家の政治を取廻しても誰が總理になつても自分を捨て奉公
する人がないからする事爲す事世界の人に笑はれ良民を苦しめる實に案じら
れたものだ

一師一日侍者に語りて曰く已れが伊深で圓頭をやつて居ると村の者が正眼寺の

妖怪が出たといつて笑つた其時分は伊深も中々あつた、スツきり貧乏で畑するにも鉄はなし其れはヒドいものであつた其れで手やら足やらで土を掘つたり畦をたてたりせねばならぬ夏の暑い日などは芋の葉を頭からかぶり木の枝を帯にはさみ、さうしてやつた其有様はマルで牛のやうだ村の者がそこを通るとそら又正眼寺の化けものが出たぞと云つて笑つたお前達も園頭に出た時はイヤ道具が足らぬのイヤ今日は暑いのと云つてナマ皮するでないぞ己れが伊深に居た時に比ぶれば實に結構だ何をやつても身を吝んではならぬ精だして骨折るがよい

一師の鹿王にあるや嘗て風邪に罹り臥すること數日病や、瘡へて煙草を喫せんと欲し火を求む侍者命に應じや、大なる火を煙草盆に入れ之をすゝ、一師一瞥して曰く此んな大きな火はいらぬと侍者因つて小なる火に替ふ師頷て曰く此れでよいと更に示して曰く平日は成るべく無用の費を節し何事かある時は惜氣もなくドシ、使ふのが眞の節儉ぢや

一師伊深にありし時一日入室して契はず百方思索するも支關重々黒きこと漆の如く容易に透過するを得ず茲に於て且つ屬み且つ慨して後山の大樹に咬着き聲を放つて絶叫すること數々なりきと

一師一日神戸より歸途京都井上某の家を訪ふ某師に語つて曰く昨夜御覽の通りの呉服屋の大火で實に驚きました然し餘り大事に至らずして結構でしたと師曰く、さうか夫は氣の毒なことだが吾は遠から知つて居つた某怪んで問ふて曰くそれはドウして知れますかと師曰く吾れも雲水の時分彼の呉服屋には二度も點心を貰ひに行つたが大きな店の事だから中々能く規律が立つて隙き間がないので繁榮するも尤もだと思つた此頃雲水に相變らず點心を呉れるかと聞たら時々臭い者を入れて困ると云ふて居た其れで吾れが思ふに彼の家も昔は中々抜け目のない内であつたが年に隨つて規律が亂れたな、何ぞ椿事が起らねばよいかと氣遣つて居た吾れが義堂について居る時義堂が話したことがあつた土藏の近所に箱や捧が地駄落に置いてあつたり磨鉢や鍋の中に三日も四日も水が入れて其儘ある様なことでは必ず盜賊が這入るか火事があるか何か出来るか一家の主人たる者は奥の間にすつ込んで居て店の邊から藏又は臺所の隅まで氣が届かねば駄目だと自然家も規律が行なはれて抜け目がなくなる、抜け目があつては家は治まらんと之に因つて考へると彼の家も坊主に臭い物を喰はせる様では急度抜け目があるのだ逆も此れでは彼の内はいけん家が傾くか火事があるか放蕩息子が出来るか盜賊が這入るか何か椿事が出来るだら

うと思つて居た何事をやつても抜け目のある様ぢや碌な事は出来ぬ
一學士某或時師に參し倫理の談に及ぶ滔々數千言説去り説來りて一答音を得ず
既にして某自ら其腹案を叩き盡して情露れ聲慄くに至る師漸くにして曰く其
れもお前口先と筆先ばかりだらう

一師一日人に語つて曰く峩山の處へ出て來る奴は大概幽靈だ爵位の幽靈か名譽
の幽靈か金錢の幽靈か理屈の幽靈か學問の幽靈かお悟りの幽靈かお世辭の幽
靈かだ其れはモウ何なりと依り處がある臨濟和尚は汝等悉く此れ依草附木の
精靈ぢやと云はれたが實に妙だ名譽の幽靈からは名譽を奪ひ取り金錢の幽靈
からは金錢をこさげ落し理屈は理屈學問は學問と一々其窠窟を打擻いて見な
さいッリヤもう魚の炎天ばしでお座のさめたものだ何でも自分の脚で自分が
歩いて出て來にや皆幽靈ぢや、マア今の世の中は大抵幽靈の芝居ぢや

一師壯年の時道友某と尾州丹羽郡繼鹿尾山に登る山は斷崖絶壁にして頗る禪行
を修するに適す山上に觀音薩埵を安置するの小堂あり寺を距ること六七丁師
は此の所を道場と定め三七日を期して接心をなし相約して交代に炊事を手づ
からす二三日を経て某曰く以後自ら炊事の勞を取らん公只坐せよと師も其言
の如くし日夜兀座す某も亦其勞を取るの傍致々として打坐す接丁の夜某俄か

に顔色を變じて師の袈裟下に伏し聲を震はし連呼して曰く禎さん助けて呉れ
いと師は其天狗の爲めに脅されしを知り敢て顧みず暫時にして大息して曰く
オウこわかつた師叱して曰く馬鹿めがと翌朝下山本寺に謝して去らんとす始
め師等の到るや寺僧謂へらく彼等風來の漢必らず二三日にして歸り去るべし
と蓋し地の靈なるを以て幾個の雲衲伴を結び接心すと雖も遂に其終りを全ふ
するものあらざれざなり然るに無事三七日の接心を了へしを以て寺僧大いに
感じ禮を盡して之れを待つ師も亦喜び留りて勞を慰す其夜山上の堂に事あり
依つて寺僧師に謂つて曰く彼の堂古より妖怪多し人皆之を懼れ夜に入りて斷
て行く者なし願くは公等兩人の中到りて之を辨せられんことをと師は某が前
事あるを以て故意に某をして行かしめんと擬す某師に行かんことを乞ふて止
まず師抽籤を以て之を決し某其籤に當り益々恐懼更に乞ふて曰く貴公の用は
何でもするからドウか行つて呉れいと師乃ち諾し去つて其事を辨す

一師一日垂示して曰く法盛んなれば魔も亦盛んなりと古人が云つた實にさうだ
己れが若い時尾張の山奥で同行と共に接心をしたが或晚己れが經行して歸つ
て見ると一人の男は退屈さうに詩を吟じて出て行つたが間もなく周章て込ん
でやつて來てオイ禎さん助けて呉れいと云ふからドウしたのだと尋ねると怪

物が怪物がと云つて顔も何も青ざめて戦栗つて居た多分天狗にでも抓まれたのだらう法盛んなれば魔盛んなりと云ふは、らのことだ明天子が政を布かんとせる時は必ず奸臣が妨げる釋迦にも提婆と云ふ奴がある何をやつても同じ事だ志を堅固に持つてやらぬと必ず魔にさゑられる日清戦争の時なとも戦争では勝つたが結局になつてからコチラの腰が弱かつたのでアノ始末さ何でも志が堅固でなくては駄目だ皆しつかりやるがよい

一師二十七八年戦役の時書を裁し會下の僧明堂上座に示して曰く

時下酷暑之候

座下起居愈御清福南山此事ニ候次ニ野禿モ無事御休神ヲ乞陳昨日新聞上ニ廿五日ヨリ愈開戦之事實ニ憚入候併此時相用候爲修行致居候事實ニ大切必ス亂暴之所爲無之泰然トシテ間ニ髪ヲ容レヌ元氣ヲ十分養戰地ニ臨候節ハ銃一ツト相成生死浮雲群魔降伏是ノミ祈弊堂モ六十三名之麥粥僧非力ヲモ不願只今朝ヨリ祈禱相始大般若一聲ニテ群魔ヲ塵シニ致度専念罷在候間交戦之場迄ハ只々勤慎以元氣ヲ養置事肝要ニ候間萬一之節ハ來生ヲ期無上菩提修行是ノミ祈候余ハ期平時萬々養生大切是又祈候草々頓首

七月三十日

明堂殿

峨山 花押

一山岡鐵舟曾て東京に一茅庵を結び僧某を聘して住せしむ某年に従つて素行不明世人大いに其非を鳴らす鐵舟之を聞き深く慨嘆し屢々面責すれども止まず一日師を全生庵に訪ひ其策を問ふ師乃ち告げて曰くウム其れは庵があるからいかんのだ其庵を焼き拂つて仕舞へ居り所がなくなればチツとは改るだらうと鐵舟手を拍つて歡喜して曰く妙々後ち書を師に寄せて曰く燒庵は其儘に打過居候が近頃少しく自慚の様子相見へ候へば自然改まるならんと存候云々鐵舟之より師を呼んで嗟哉の燒庵主と云へり

一師一日島村某を訪ふ談悟道の事に及ぶや某火箸を劔に擬し兩手を以て之を頭上に翳し一刀下に之を兩斷せんとするの勢をなし師に向つて曰く私は武人ですから此れで極め込んで居るですがと師曰くウンそれ一つになつて來いと更に某に謂つて曰く禪にはナア文禪と武禪とある曹洞の如きは文だが己れの禪は武ぢや

一俗某性禪を好まず師に謁する毎に禪僧の行ひを嘲る師莞爾として多く言はず

チツと頭をうづかして來んと分らんナア一日又某宅に於て頻りに師の説話を遮る師笑つて曰く眼鏡をかけて物を見るから困る某曰く眼鏡なるかな以て遠を望むべく以て微を顯はすべし而も紛々たる塵砂之を拒ぐに足ると自ら昌言として喜ぶものゝ如し師乃ち曰く其の眼鏡は様ばかりで向ふが見へない

一師一日垂示して曰く近頃布教々々と世間で八釜敷云ふが何でも禪宗は身を以て説法すると云ふ事が肝心だ説教も演説も必要だが大抵の人が中流以下の爺婆ばかり相手にして鬚でもあると巡査にも閉口する様な小智小見でさ又説教演説しては到る處で誠に俗人にも恥る様な舉動がある、あれぢやア却つて佛法に劑をつける丸で田舎廻りの乞食芝居にも劣るよ赤い衣で金襴の袈裟を掛けて口ばつかり甘いことをぬかして信徒を欺きくさる坊主が多い己れが感心したのは道行堅固の徳だなア先年東京へ行つて歸りに新橋の停車場で待つて居たら獨り鼠色の衣を着て穢ない風をした七十許の坊さんが矢張待合に腰をかけて居た、すると後から金襴の袈裟や紫の衣を着た化物の様な若い坊さんが車でぞろ／＼やつて來て皆其きたない坊さんに頭を下げてドウもはや此度は段々御神勞に預りました御承知の一條も色々心配致して見ましたが何分あなたに頼むと一返御挨拶下さらば双方圓滿に収りますから御歸りの節猶一度御立

寄りが願いたいと云へば老僧が覺束ない口元で左様なア老僧が顔さへ出せば濟むことなら又参りますと云ひ居つたが實に徳行と云ふ者は恐ろしい者ぢやないか、べちや／＼しやべつても實際でないとい人は承知せぬからなア禪宗坊主がシャべつて人の爲になろうと思ふ様ぢや禪宗の飯は食へぬぞ顔さへ見れば人が信念を起すと云ふ風でなければ駄目だ

一師一日某居士に示して曰く參禪は擊劍の名人同士が正宗の刀を抜て切結んだやうなものだ、ハツと云ふ間に首は飛んで居る飛んで居るのも知らずにべちや／＼饒舌つて居る奴がある

一師の鹿王院に入るや僧俗其高德を傳へ聞き争ひ來つて法を問ふ而も師は一語も之に答へず曰く法を問はんと欲せば天龍寺へ行け左らずば東福妙心建仁相國皆それ／＼巨匠あり就て問ふべし己れは未だ答ふべき分に非すと南宗寺に招請せらるゝに及んで始めて衆を接す

一師遷化前一日隣某に向つて曰く當時のお醫者さんはワシなせには合はん學士やとか博士やとかいやドクトルぢやとか云ふても西洋で習つて來たことを受賣するだけで實地には熟練がないから駄目だ

一師各宗會議より歸庵晚餐の時侍者に云て曰く今日は二十分間に百八十萬圓の

仕事をした大菩提會の内相談に己れが今の様に坊主自身が佛を信せず居て信じて居らぬ世間の者から中々二百萬圓は貰うへないドウでも其仕事は仕度いなら先づ二十萬圓位にして實踐躬行やつて見るのさ其の上出来るなら千百萬でも一億でもこんな結構な事はないと云つたら色々云ふ者もあつたがトウ、其の談の通りに議決した此の二十分の相談で在家の人は百八十萬圓たすかつた……なアに世辭坊主の食物になるのサ

一師一日松方伯の別荘を訪ふ將に歸らんとするや伯懇懃に門送し庭前の苦むしたる石を指して曰く此間耕雲和尚が見えた時此石を非常に好い雅味があると賞められたがあなたは何と思はれます師曰く峩山は庭師や石屋の事は一向不案内です

一師天龍再建の勸化帳を携へて某家に到る主人師の法衣の餘りに龜末なるを氣の毒に思ひ本堂の再建より先づあなたへ衣を一枚進ませうと云ひければ、ハアそれは有難い見事峩山の着られる程の衣を拵へて呉れるか、ドノ位で出来ませ、ウンまづ四五萬圓はかゝる、そんな馬鹿な衣がありますか、あるとも現に今天龍で大工や人足が頻りに裁縫して居る、それは本堂ぢやありませんか、うむ其本堂が峩山の衣ぢや

一京都の某代議士安心の法を聞くと欲して入室す師先づ口を開きて曰く何でも國民に代つて天下の評議をする人ならば先づ其五尺の糞囊をスツぱり打棄てなさい自分の身体を思ふやうぢや火打箱程の事にもうろたへ廻るものだ

一師濃州本堂寺の大法會に招請せられ一衆二百餘員と共に三週間の會を結び臨濟録を提唱す一日講畢て參詣の信徒に説て曰く皆さんは眞宗の檀家ぢやさうなが何んでも念佛一口唱へるにも一心不亂でなければいかん昔或處に大層念佛を唱へる婆さんがあつた朝から晩まで立つにも座るにも只南無阿彌陀佛を唱へてお寺參も忘らす世間でも念佛婆と云ふ綽名を付けた位であつたが其れが死んでからドウしたのか地獄の黒門へ引張り込まれたので婆さんは驚き私は娑婆に居る時いつも念佛を唱へて念佛婆と云はれた者で其念佛を車に一杯い積んで参りましたからドウか極樂へやつて下さいと頼むと鬼共が其念佛を唐箕にかけて見るとアア、孫が小便する南無阿彌陀佛、オウそれ、火が燃へてる南無阿彌陀、オウあふないあふない南無阿彌陀、オウあつた南無阿彌陀、今日はゑらいア、それオウこれ南無阿彌陀佛、と臺八車に十ばい許りもあつた念佛が皆糟ばかりであつたからポツポツと飛んで仕舞つたが最後に何か唐箕の底でゴト、云ふものがある鬼共が詮議して見ると此婆さんが娑婆に居

る時分或る夏の日の事だ杖をついて何時もの如くお寺参りをする途中廣野原を通りかゝつた時に天が俄かにかき曇つて雷がひびく鳴りだした此婆さんは非常に雷の怖しい性分であつたから大層こわくなつて来たので一心に念佛をしながら歩いて居つた雷は益々烈しくなつてガラ／＼びしやツと落ちた其音に婆さんは思はず南無阿彌陀佛と一生懸命に一聲唱へて倒れてしまつた此一聲の南無阿彌陀佛の功力に依つて地獄が忽ち極樂と變じたと云ふ事がある皆この通りだから一心不亂と云ふことが大切ぢや口先ばかりの念佛なら百萬だら唱へても糞にもならぬ皆さんも折角お寺参をし念佛をするなら何んでも一心にやるがよい又念佛許りぢやない何をやるにも一心が大切ぢや役人は役人百姓は百姓坊主は坊主と銘々一心に其職を守るがよい兎角今の世は上ればかりで一心こめてやる人がないから何をやつても六な事は出来ぬと

一師曾て東京道生會に臨まんと欲して途名古屋を過ぐ偶々美濃勝川青山家に葬儀あり大山瑞泉寺無學大和尚を請せしに和尚病ありて果さず敢て教を請ひければ京都の嵯山和尚東上す宜しく名古屋に出迎へ之に頼むべしと某依て多くの伴僧あるならんと思ひ駕三丁車數輛を仕立て待ち受け居たりしに師は弊衣只一人の侍者を具して卒然某が家に到れり某大いに禮を盡して待遇す葬儀了

て將に歸らんとするや某駕を進めて休まず師駕に乗らんとし偽り誤つて倒る人皆之を笑ふ師平然として曰く嵯山は嵯山駕は駕ぢや二つになるのは當然ぢや此んな物を持つて来るから悪いのだと云つて又飄然として去れりと

一一日某文學博士來り參じ頻りに自己の識見を吐露す師微笑して曰くお前さんは牛の穴ぢやのうと博士佛然として問ふて曰く何んと云ふ事で御座りますか師曰くいやサもうのしりだと云ふ事ぢやわい

一師常に曰く釋迦や達磨が頼んで來ても許さぬ時は許さぬ王公貴人でも法の爲には人情はないぞと今の宮内次官川口男爵が主計休職中曾て堺南宗寺にて師に參じ頻りに自己の妄想を説く或時三拜して入室せんとするや師叱して曰くエ、又糟理屈かと恰も百雷の一時に轟くが如くなりき川口後ち人に語つて曰く海軍で大砲の音にも驚いた事はないが和尚のアノ一喝には膽が裂けたかと思つたぞ

一佛骨の將に京都に着せんとするや菩提會々員某天龍寺に到り師に謁して乞ふて曰く明日愈彼の佛骨が着することになりまし了就ては貴道場の雲水衆も靈龜をかつひで頂きたいと師曰くウム眞箇の奉迎なら雲水どころか吾れが一番先に草鞋がけて昇ぎに行くがイヤ正使だとか副使だとか總理だの何だのと云

つて馬車や人力に乗る様な付合には吾れは勿論雲水とて一人もやることは出来ぬア能く考へて見るがよい信者の汗や齋で馬車や人力などに乗て済むかッンなことで奉迎したつて釋迦は喜ばぬわい

一本堂再建に着手するや師は時々自ら材木を運び石を擔ひて人夫土方の手傳を爲し玉ふ衆之を傍觀するに忍びず相代らんことを乞ふ師輒ち曰く此大普請に吾れが傍で安閑と見て居る様ではいけぬ矢張人足の仕事もやらねば駄目ぢや然し貴様等は用はない精出して骨折れ伽藍再建は巖山の役ぢやと遂に之を許し玉はざりし

一維新の初め堺御門の變あるや義堂和尚衆を其病床に召し明日は必ず戦争始まるべし左れぞ予が號令せぬ内は必ず騷擾すべからずと諭し茶飯の饗應をなせしに某々等の先輩恐怖して碌々食事もなさりしが師は十二歳の一沙彌にも似ず悠々六椀を喫し安眠すること三四時間和尚示寂の時特に之を賞して清水に向ひ斯門を興隆するは必らず巖山ならんと語られたりきと

一師の最も懸念なる醫某一日來診す師苦熱の激しき爲め病床に大あくらをかきさア見て呉れと醫曰く此の大患にさうして御いでになつてはいけませんと師は莞爾としてア、よいから見て呉れ醫曰く遠慮のない佛様には困る師語を續

て曰く佛様には遠慮はいらぬぞ

一師は夏の夕べ常に暗室に坐し默然と好嗜の煙草吹きつゝ嵐山の月を賞し大衆の獨參を聞き玉ふ衆暗室を心當に平生師の居玉ふ處に向つて三拜し將に見解を呈せんとするや師は却て其後に在りてエヘンと一咳して時々其機を奪ひ玉ふ侍者大衆の困却を慮り折節燈火を進むれば月に燈火は不風流だ些少の事でも不陰徳してはならぬ皆の者が眞暗で困ると云ふのは畢竟目で物を見るからだ耳で物を見さへすれば見と不見は明暗に何の關係もないのだと教誨せられたり

一師一日茶禮の次を以て衆に垂示して曰くカウやつて修行して居る者は何でも初志を貫徹すると云ふことが大切ぢや修行中は名譽だの利益だのとドンな好い事が山はせあつても手出しをしてはならぬ手出しをしては駄目ぢや……うひ手出しをすると夫に奪はれる吾もナア十七の時義堂に離れてから伊深へ行て今日まで何一つ出来た事はないが唯初志をドウなりコウなり守つたお蔭でマアこうやつて皆の托鉢の膳をかちつて居れるのだ何でも如此して佛袈裟を被て居る以上は皆法の器だ若い時は二度ないから一生懸命に骨を折つて初志を全くするがよい若しも誤て己が身に創をつくれれば法に創をつけるといふもの

だ、サウして見ると決して粗末にはならぬ

一 二十八年以降戦後の經營其の當を失し財政大に困難を來し朝野沸亂せり伊藤博文其任に堪へずして内閣を松方伯に屬す伯辛苦經營漸く財源を求めて之を實行せんと欲して猶未だ決せず蓋し朝野の攻撃を恐れてなり偶師の來訪あり伯師に向つて曰く戦後の經濟殊の外難澁にて實に困却致して居ますと詳に其所以を説く師は只うん／＼と云て聽き居たりしが談了るや否やこんな時は誰か出ても矢張り六つかしい然し其局に在る者がシツかりやらねば駄目だ、ナニ身を以て奉公する決心さへあれば大臣が二人や三人打殺されたつて何でもない生命が惜いから何でもやれぬが生命を捨つると云ふ氣でやりさへすれば天下にやれない事は一つもない死ぬ覺悟でやりなさい必ず遣れると伯此に於て意始めて決す

○

一 峩山は骨格が近代の羅山和尚に似て居たナ天龍寺ではマア關楨和尚以來八十九十の雲衲が輻輳すると云ふことはなかつたが實に高徳な和尚さ吾れが鹿王院に留護して居た時義堂和尚は遷化になる峨山はまだ小供あがりであつたが十七の時だ美濃の伊深へ修行に行きたいと云ふから合羽に脚絆、網代笠、袈裟文

庫と雲水一と通りの支度をしてやつた、スルと峩山の云ふには何んど本を一冊持つて行きたいが全体學道修行の始めから大事了畢の曉まで用に立つと云ふ本は何がよからうと尋ねた吾れは覺へず冷汗が出た、其れで東嶺和尚の無盡燈論がよからうと云ふて持たせてやつた吾れも前途を思ふので翌日嵯峨の村外れまで見送るつもりで話し話し三條の千本まで覺へず行つてヤア、えらい處まで來てしまつたが此處で別れとしやう随分道中大事にと云ふて西東に別れて二三步行くと急においおいと呼ぶから顧みれば峩山眞面目になり聲を勵まして無事に修行して歸へつたら必らず老兄の補佐をしますと云つたが吾れは再び冷汗が出た(新雲室の談)

一 峩山老師は此處(伊深)に居て直目をして居る時分人の捨てたる椰子を洗ひ置き月夜には人知れず後門の下駄を集めて鼻緒を立て直し雨の降る晩は雪隠の糞巾桶を雨垂下に置いて水が一杯になるまで坐禪をして一杯になると雪隠の掃除をせられた己れは之を見えて覺へず寒毛卓豎した潜行密用と云ふは此人の事ぢや其徳一世に高きは不思議でない(霧隠軒の談)

一 最初峨山様の鹿王院へおいでの時は六つでありました師匠と私と四人連で峨山様は僕に負はれてゐした太秦まで來ますと僕が坊様は大層重いなアちとお

歩きませんかと云ひましたらお前は何の爲に來たぞとお叱りになりました或る茶店に大きな石榴を賣つて居るのを見てあれを買ふて呉れたら歩くと云はれましたので買ふてあげましたら非常に喜んでツイ鹿王院まで歩いて見へました直ぐ義堂様のお居間へ参りますと峨山様に坊の在處は何處かへとお尋ねになりますと坊は在處を忘れたと答へられました義堂様は手を拍つてよ
う云ふたよう云ふたと繰り返してお喜びになりました(藥師寺老尼の談)

一私は峨山和尚を伊深に十餘年一しよに居たが峨山和尚は何をやつても並の雲水と違つて居た晝はいつも馬鹿のやうにぐらく眠つて居るが夜はぐんぐん骨を折る日暮になるといつも勢が出るから夜鷹といふ評があつた其れで雲水に俊骨を具へて居る奴があるといつも厳しく督して夜なと横になつて眠て居ると峨山和尚は物もいはず襟首とつて引づり起し椽端へ叩きつける擲ぐるそ
うしてお廟の方へ連れていつて此佛法が滅せんとして居るに貴様等が怠惰けて何うすると大喝する出て來ないものは呼にやる臘八の時なと其眼玉が實に凄かつた、どうして角力が好で力のある奴が來ると角力をとる棒押しをする相手のない時には獨りで大石を持ちたり材木を振廻したりして汗を取つてから坐禪をする制間には毎夜深山に入り岩石の上なとで露坐をした深夜黒暗々裏

で坐禪をすると大いに定力が鍊れる夫も蒲團なと敷くやうなことでは駄目だと云れて居た(東海庵の談)

一私は非常に老師の恩願を蒙りましてお話も屢々承りましたが一々記憶して居ません又大抵は新聞雜誌に出ておりますが今一二お話し致しましやう兼て私に筆を造つて呉れいどのお頼みでありましたが暇がなくて拵らへずに居りましたら新聞に御病氣と云ふことが出てありましたのでお見舞に伺はねばなら
んですが筆が出来ないので思はず遅れまして漸く先々月の二十七日に筆を持つてお見舞かたぐい伺ひましたらお寝みになつておられました老師がこゝへ
來いと云はれましたので枕元に行て筆を差上ますと三本の中一本は大層お氣
に入りましたと見へて能く出來たと御満足の様でした暫らく經ちまして己れ
が死んだら此筆は香典に呉れいと申されました其時大分御重症のやうに見
受ましたので長くお話を承はるも如何と思つて直に副司察へ下りまして己れ
が死んだら香典に呉れいと云はれましたが一体此度の御病氣はどうでしやう
と副司さんへ話して歸りましたが其れから五日目に遂に御遷化になられたの
で先の言葉と思ひ合せて見ますと御遷化のことは前より知れて居たのかと思
はれます

或時老師は大層角力がお好きだと人が云いますが眞實で御座りますかと尋ねましたらウン己れが伊深に修行して居る時雲龍と云ふ角力取が来た其れは斯ういふ譯さ東京の回向院で出世の大角力があるから一番出世しようと思ふて登る途中下の村で正眼寺の坊主が角力取ると云ふ事を聞てやつて来たのだ回向院の出世角力に登る奴だから中々強い始めは大衆の中で強い者が出て交り合てモンで貰つたが誰一人勝つ者はなかつた其れで八釜しく云つて己れに取れと勤めるので一番取る氣になつてやつて見たら幸に己れが勝つたそこで雲龍といふ角力取は坊主に負ける位では東京に行つても駄目だと云つて歸國したさうだ全体此れは己れが勝つたのではない中々彼は強い己れなぞが三人や四人一時にかゝつても逆もいけんのだが彼の時は朝から大勢の者と取り詰めにとつて疲勞れて居る所に己れが行つたから彼が負けたのサと云はれました何事でも謙遜して功を他に譲られる御方でした普請なども隠居のお影で出来たと云つて居られました

或時短冊を持つて行きまして御染筆を願ひました尤も此れは人から頼まれたのでありますが實に其人の座右の銘とも云ふ句でした……さがるはど人は見上ぐる藤の花といふ古句でありました此人は性來なか／＼傲慢な人で少しば

かりの官位を鼻にかけて碌に頭も下げぬと云ふ風で謙遜なぞと云ふことは知らぬと云ふ位の人です其時のお話してありました此頃の者は我慢が強くいてけん少しばかり學問すると直にそれを鼻にかけて人を馬鹿にする官位が高くなれば官位が鼻の先にぶらつく金が出来れば金が鼻の先にぶらつく其れで腹の中はドウかと云へば虫ケラにも劣る妾を持つたり相場をしたり別荘を構へたりして非道なこと計りやつて居るこんな人が上に立つ様では道徳は決して行なはれるものでない日本も駄目ぢや實に忌／＼しくてならんと云つて慨嘆せられました

それから進むを知つて退くを知らざるは野人なりと云はれたことがありました此れも此頃の人は退くことを知らぬでいけん何をやるにも退くと云ふことが大事ぢや古人は進む時にはドン／＼進んで退く時はズツと退いた今の大臣などは少し政治が遣りにくいど何にかにカコつけて辭職するこんな不親切なことはない、こう云ふ時はズン／＼進んでやるが大臣だ其れに國家が無事大平の時は退きもせず何處までもヘバリ付て居る少し議會でも噪ぎ立つと直ぐ辭職だ意氣地のないも程があると
これも老師のお話してしたが此頃或家に行つたら昨家賊が這入つたと云つて

大騒ぎして居た一家の主人たる者は目を八方に配つて抜け目のない様にせねばいけん抜け目があるからツイ賊も這入るのだ賊は慎家の門に入らずと云つて憤み深い家は能く行き届いて居るから這入ふと思ふても這入れぬ賊ばかりではない番當が金を遣い込んで帳尻を胡麻かすのも息子が道樂するのも主人が行き届かぬからである何でも慎むと云ふ事が大切だ用心するがよいと云はれました此事などは大いに感じました一家の上に取ては實に大切なこと、思ひます(井上某の談)

一 小弟天台より出で、初て拜席參學の日類りに法身を説き横説堅説良や久し師僅かに口を開きて汝が所説は口耳四寸の法身のみ兎角教者は法身の邊りを説くものかと

一日舉山の衆托鉢に出でし後師出で、手から畑の邊の草を刈り炎天焦くが如きをも氣附かぬもの、如し其外出の大衆を思ひやり玉ふ法愛の深きによる事明かなり小弟は夏ながら寒毛の卓堅を覺へ候

小弟天台に歸らんとして請暇の拜に出づ師咫尺に近づけて看經可なり坐禪可なり唯だ心得よや看經は法財を聚め得るも法燈は坐禪にあらすんば點せられざることをと垂誠を給はり候(飯山留學僧某甲)

一 東京に於て居士相謀り道生會を設け前天龍滴水老師を拜請して接心會を結ぶ明治廿九年十月峩山老師は侍者となりて來り臨まる師は是より數年前已に印可を得て天龍僧堂を督し百餘名の大衆を隨へ居らるゝにも拘らず平然として見臺を捧げ出て來り之を講座の前に周旋し侍者の役を勤めらる世の尋常名聞を貪る輩には決して爲し得ざる所なるを聊も辭む色なきは老師の胸中卓落瀟灑たるを知るに足れり

滴水老師既に老年に及び峨山老師道生會の接心を引受して全生庵に出席せらる明治卅年十月五日は休講の日なり然るに當日庵に到りたる者は江川鐵心森田貫一、梅子尼、鈴木信仁にて茶などを喫し居るに老師は卒然諸氏に向ひ近傍に苦しめらるゝものあり之を救ふべしと諸氏は何事を曰ふかと思ひ之に應せざりしに老師は我往て自ら索めんとして行かれければ諸氏も不勝々々に隨ひ行きしに菴室より凡五六十間隔たる墓地の境に一の小蛙蛇の口中に在りて大に苦惱煩悶するを見出したる人心中一點の陰翳なきに於ては事物の動靜は來りて自然に感通するものたるを覺ゆ老師平生の襟度澹然として虛靈なるは此一事に於ても之を知る事を得たり(信仁居士)

一 御存じの話かも知れませぬが峩山様が八九才の頃或晩私しの家にお越しにな

りましてオイおれは盛が取りたくてならぬが盛を取らせぬかと云はれました其れで種がらを竹の先にくくり付けてあげますと暫く経つて盛を左りの手に鷲攫みに攫ってお歸りになりまして私の前にユツと出して盛が光るか佛が光るか云はれたので私は妙なことを云はれると思つて今に忘れません
確か峩山様が十二三才の頃と思ひます正月の餅を搗いて居りましたらチヨコと表からお越しになつてオイおれに餅を搗かせて呉れぬかと云はれましたサアお搗きなさいと申すすと直ぐに一日お搗きになつたので砂糖を付て差上げましたら己れは餅は喰いたくない唯搗きたいのだと云つて一つも召上らずでした尋常の小供ならば搗くよりも先づ喰べるのですが峩山様はアベコベでした

義堂様の御遷化になつたのは確しか峩山様が十六七の頃と思ひます義堂様も中々殿しい御方で貴様が名僧知識にならぬと食い殺すぞと時々云はれたそうです其れで峩山様も吾れはどうがなしてゑらい者にならねばならんと始終御話してしたが遂に義堂様も御遷化になられたので大層お力を落されて吾は丑の歳だから師匠を突殺したかも知れんでゑらい者になつて御断りせねばならぬと云はれましたが丁度其時分虚空藏様に丑の時詣りをする者があるとの評

判で二十五六日も経つと鹿王院の禎さんと云ふ噂さが誰云ふとなく高くなりましたので私も不審の餘り之を探ぐつて見ますと斯う云ふ事で義堂様が御遷化になられたに付て外に殿しい好い師匠がないのでドウか好い師匠を得る様にと一ヶ月ほど毎夜丑の時をろ人に知られぬ様に御詣りになつて満願の夜渡月橋から観音經を流されたさうです……ハイ其のお經は日々指から血を出してお寫しになつたさうで御座ります(小山某の談)

一余の初めて師に参するや幔帳隆々たるものあり遙かに隔つて一禮するや早くも師に一抄を加へらる二回三回に至りて全身冷汗淋漓となり四回に至り擬議せんとする時忽ちビシヤリと一掌を與へらる其機鋒の峻嚴惡辣此の如しと雖も畢つて禮拜し歸らんとするやオイ此間作つた詩がある一つ直しておくれ今度は己れが頼むと恰かも温風の面を吹くが如く擒縦實に自在を極む
他の師家に参せし時は公案が透つたやうな心地がする師に参せし時は公案がパシヤと崩れてしまふ世間で他の師家は佛を作り峩山は佛を奪ふと云ふが實にさうだ(無隱居士の談)

一師塚の南宗寺に居られた時平常用ひられし時計の紐は紙捻りだ一日老師の不在中に其紐を立派な鎖と交換して置いた師歸來一見笑ひながら元の紐はドウ

した、へいわれは私しが羽織の紐に替て貰いますハ、ア今の人は時計持でなく大方は鎖持ちやドンな奇麗な鎖を付けてもチヂ巻くことを忘れては用をなさぬ朝の八時が十二時になつたり一時の會議が日の暮ぢや、其んなズルイ奴に限つて鎖ばつかりピカつかせるのさとお示しになりました實に老師は時刻の間違ひをなさらぬ御方で私は之を忘れぬ様に一世一代の羽織にも紀念の紙捻紐をつけて居ます此の御示しばかりは生涯受用しても盡きませぬ(某居士の談)

一私が此春の大法會の時相見に行きましたら某和尚師と對坐し嵯山さんは實に大徳だ吾等はドウも不徳でいけん隨身の雲袷は僅に八人か九人何をやつても思ふ様にゆかんと師失笑して曰くおれは不徳だ不徳だと愚癡こぼすやつは大きらいだ不徳と云ふことは不實だと云ふ異名だ法に不實だから不徳なのだ不實な修行をして置くから修行する蟹水が不實なのだ人に不實をすると人が吾に不實だ貴公は吾れの處に来るといつでも己れは不徳だ不徳だと云ふが不徳と云ふのは自分の不實と云ふことを白狀するのだ人が色々悪口云ふのも人が用ひて呉れぬのも皆自分が不實だからサと喝破せられましたが實に手ひひい挨拶だと思ひました(無隱居士の談)

一余一日廣瀬幸平翁を須磨の別業に訪ふ坐に嵯山和尚あり其談するところ一場

の世話に過ぎざれども趣味津々として盡ざるものあり曰く人間四十といふ年頃は最も多方面に働き善く萬事役に立つべき時なり先づ僧家で云へば子僧の役でも番僧でも和尚の代でも皆相兼て出來得るなり商家で云へば丁稚手代番頭は申すに及ばず主人の代となるも人が承知して受て呉れるのは四十位迄劫を經たるものならざるべからずされば我天龍寺の再建も愚禿が最も働き易き時で仕合であつた然るに五十六と云ふ年になると自から立働く時代は過去り坐して人を使用し監督するといふ風にならねばならぬ老功を積み貫目のあるべき年輩者が壯丁の様にバク／＼立働く様では老功も貫目もあつたものでない云々と如何にも和尚の言の如しである余も丁度四十代今が働き盛り親は老ひ子はまだ小さく一家の運命を一身に負ふものなれば是非に働かざるを得ざる境遇に立つものである故に此の和尚の言は深く味あるを感じ今に記憶に留めて忘れざるなり(南涯居士誌)

○

一師會て大坂粘笑會に臨みて寒山寺に在り一日提唱並に聽參を終へ二三の居士と清談數刻す曰く此間京で鐵砲打が鳥を取るのを見たがナンと可笑しいものぢや鳥がコロと落ちてから暫らくしてボンと音がする文明と云ふやつはウツ

かり出来ぬヲ、見なさい近頃のやつらは断りもなしにドシ〜悪い事をして置
て後から謝まるのが流行ると時に沙彌某眠けなる眼をこすりつゝ出て來り老
師もう寝かして戴きます師曰くもう寝て來たのぢやろうお前もコボロンの方
ぢやナ

一師一日大會の時、寮元を召し垂示して曰くお前が今度は典座だとうな工合よく
やつて呉れ大勢集めて御馳走しても飯が一番大切ぢや千人近ひ飯を日々炊く
のだから随分骨が折れる何でも他の人には目立つた遣り好い仕事をさして上
の者は目立ぬ處で人のいやがる肝心の仕事をすする様にすれば萬事うまく行く
元より身を捨る修行だから斯う云ふ時にドノ位迄此身が捨てられるか此身の
捨て加減を驗めしてみい供養も種々あるか身を以て供養するのが第一ぢや古
人も憂き事の猶此上につもれかし捨し此身をためしてや見んと云た……

一師一日垂示して曰く櫓大鼓にふと目をさまし明日は此の手でなげ様やらと角
力取位でも本分の爲めには實に油断はない殊に無量劫來業障の絆を打切ると
云ふ此修行ぢや熱い寒いに赤はれ眠たい食たいにケロついて居る様なヤニコ
イ事では禪宗坊主の中間入は出来ぬぞ世間のやつ等は、大抵衣食住の丁稚だ衣
食住の丁稚で此生涯を送る様なら一と還俗して車夫にでもなるがよい

一師遷化前一日戲に咽喉をころ〜と打ち鳴らし忽然と後に倒れ侍者を顧みて
曰く峩山が今死んだら世の中の坊主共は皆歡喜踊躍で騒ぐだらうのう魚を喰
わうと罎を持たうと山子をやらうと破戒墮落勝手次第だ

一師東京全生庵に在りし時一日華族女學校の某女史調を乞ひ口角沫を飛して頻
りに歐洲各國の文明及び國風宗教等を説く師默然として之を聞く事殆んど三
時間女史去つて後侍者を顧みて曰くア奴も三十棒を與へぬとマトモの女にや
兎てもなれん

一師一日大衆を誡めて曰く金襴の袈裟や紫の衣を着ても腹の中が糞袋では糞に
もならん此んな奴の讀經よりは義太夫の淨瑠璃の方が餘つばど難有い何んで
も大法の爲め此身体を捨て、他日人天の爲めにならうと云ふ者が寺を持ちたい
金襴の法衣が欲しい紫の衣をドウぢやのと云ふ様な拙ない根性は打捨て若い
時は二度ないから何んでも一生懸命にやるがよい

一師は平生絹布を用ひ玉はず其遷化の際も極めて補綴せる一見雜布の如き綿布
を着して世の奢侈を誡め玉ふ近頃老嫗某師の高徳を慕ひ遷化の際着し玉ひし
綿衣を乞ひ之を保存す某男爵之を聞き紫の衣を被て 陛下と御對坐の出來る
身分にして此の如き衣を着せられしは尊き事なりと云つて學生などに之を告

げ又遠近の志士其弊衣を借りて之を兒童に示し或は奢侈非行を誠むるの具となせりと静屋居士北垣國道其弊衣を納めたる箱に題して曰く

是天龍寺管長故峩山和尚遷化之際所着用嗚呼和尚學窮釋氏濫與功德廣大爲一代巨擘世之所知也而朝夕包養精神者不過此一弊衣今天龍不顧之而一老婆子能保存之不亦奇哉

明治三十四晚春

静屋居士記

一師性酒を嗜み曾て伊深の泰龍老師に參學し同行蜻州和尚と役寮に潜で密に酒を飲み陶然興に乗じて高談大笑終に激論を生じ隠寮を驚かす老師大喝して曰く役寮で酒を飲む者は誰だと師聲に應じて曰く役寮で飲むが悪くは先づ隠寮からよすがよいと老師も亦酒を嗜めども已むなく師等と相約して一山禁酒の令を布く居ること歳餘信徒某之を憐み密に味醂一瓶を老師に貢し以て養老の資となす師之を探知し一夜老師の在らざるを窺ひ窃に之を傾け殘餘は總て壘に滌き去つて知らざるものゝ如し老師歸つて後微笑して曰く峩山めヤル哩と之より遂に禁酒の令を解く

一師曾て大坂拈笑會に遊化す會員例を攀ちて金貳拾圓を布施す師之を受け途を枉けて伊庭貞剛を伊豫住友鑛山に訪ふ貞剛亦旅費若干圓を呈す師之を破底の

杜多袋に納れ歸山後大衆を饗應せんと欲し得々として瀛車に投じ車窓に身を寄せ彼處の山此處の川を興す明石に至る頃漸く杜多袋に氣づき之を驗すれば金は早や飛び去りて影だに見せず杉本某之を聞き或日師に謁して次第を問ふ師曰くウム姫路から怪しい奴が一人おれの側に乗つたが奴は明石で下りた多分奴が盗んだのよと某曰く明石で查公に告げて取調を請はればよいに師曰く金は因縁によりて己れの杜多袋に入り又因縁によりて杜多袋を去つたのだ何ぞ俗吏を煩はさんやと呵々大笑す

一某一日師に謁し問ふて曰く現今の趨勢は學術技藝より諸種の末技に至るまで改良に改良を加へて速成を旨とす禪宗も大に改良を施し速成の方なきや師曰く儒學などに於ても喃師が子弟を憐むの深きより遂に口傳に流れて肝心の心傳はお留守になつたのぢや己れが宗旨は復古ぢや改良だの斬新だのと違つて行ては宗旨は臺なしぢや己れは復古の一天張ぢや

一師曾て山縣侯と會見し談たま〜政治の事に及ぶや師侯に向て曰く露西亞や支那に二枚舌を使ふやうな意氣地のないことで能く總理大臣が出来るな侯少しく色を變じて曰く内閣を御身に明渡すから見ごと組織せられるか師巨眼一睨して曰く其位の事が出来いで如何するか

一師遷化前一日妙心寺塔中なる完應和尚師を病床に訪ふ師床上に坐し侍者を顧みて曰く和尚は酒を飲まぬ故紫蘇酒でも差上げよ序でにワシも一杯と小杯を傾け微笑して曰くア、これでワシも成佛した

一師雲水を愛すること慈母の赤子に於けるが如し然も新舊の深淺厚薄の別を立てず一日微發に應じて將に入營せんとする雲衲某を送りて曰く僧堂では高下の別はないが軍隊には嚴重に備て居るからシツかりやらぬと行かぬぞ

一往年各宗相謀つて佛骨を迎へんと議す議員某師に相見以て其贊成を請ふ師曰く山師の間は我山は出来ぬわいと月餘を経て佛骨將に着せんとするや師は其奉迎準備の事を聞き此んな事では人を濟度するどころではない人に濟度されねばならぬ

一師は空言放談を好まず一日客某に談りて曰く今は空言の世の中だモチツと進んで實行の世とならねば日本も駄目ぢや總理大臣始め言ふ事は善いが實行は一も出来ぬ、ヤレ行政刷新だのヤレ財政整理だの何だの彼だの云つて八釜しい事だが一も出来た事はない……うむ夫れは其筈よ脚下が皆留守なんだ

一師一日侍者某に庭の掃除を命す時に風冽しく落葉紛飛隨て掃けは隨て落ち侍者遂に倦みて箒を止む師之を戒めて曰く風は天の所爲だ掃除は師の命だ風は

風として吹くに任せ師の命は師の命として之を行へ凡て逆ふと云ふ事は決して宜しくない

一師性大に酒を好み一升を傾けて猶且つ平然たり一日某に戯て曰く予をして酒を呑ましめよ一合にして禪機儘に至り五合にして春風駘蕩たり飲んで一升到れば天上月出て寒潭魚躍る

一師一日佛骨奉迎相談會に臨む委員某師の意見を叩く師徐ろに口を開て曰く各宗協議の上とあるから別に強て反對もせぬが予一個としては不賛成なりと斯く斷言して後其理由を説明し金剛經の若以色見我云々の文を引證し佛敎の本意は決して色相名字の上でない一度本領を失すれば百の佛骨千の舍利も牛頭馬骨と選ぶ事はない

一大接心結了の翌夕師寮元數名を召して曰く此頃中は接心で骨が折れたであらう已れは今が藥石だマア一杯飲まさうと杯を與へ鉢底の薩摩芋を徐ろに取りて膳の片端に置き箸もて左より之を銜きウム是で行かねばと右より銜きウム是でも行かぬと更に前後より銜き役位を一瞥して曰く此れは誰だ伊藤か又前の如く前後左右より芋子を銜き是れで行かねばと膳の下より手を伸して之を撃け此れは誰だ山縣か又前の如く四方八面より之を銜き下より掴んで其れ

で行かすばと鷲掴みに上より之を掴み此れは誰だ……役位等謂へらく是れ大接心中の事を政客に托して諷示せる者なりと双腋より汗を流し肅然容を改む一僧師の面を打ち守りテア其れは誰でしよう師微笑を含み大西郷か

一僧某一日利井明朗師を六條街に訪ひ峨山老師と會見の事を叩く曰く私が峨山和尚を天龍寺に尋しは昨年七月廿日でした法要があるによりて暫時待ち呉れとの事で暫く休息して居ると間もなく歸られ侍僧に導かれて其室に入り佛骨奉迎に對する意見を承る折から大坂信徒某よりの供養とて和尚と共に茶粥の饗應に預り御馳走と云ふ程でもなかつたが餘程味ひのよい粥であつた其時私は峨山和尚に向ひあなたは尊き管長の位にありながら日々かゝる魚食で御座りますかと尋ねるとお前はドウ云ふ身分かと返問されました私は眞宗の勤學と云つて尤も重き役で常に二百有餘の僧侶の邪道に行かぬ様に教導して居る者ですと答へると和尚はウンそんな事か吾れの處にも坐禪をする雲水が八十人程居るが今にも佛法が潰ぶれる食ふにも米はなし飲むにも水はない然し戦はねばならぬ打死せねばならぬと云ふ時おれと生死を共にする者が慥に四十人位はある名は天龍寺の管長でも實は雲水の親方を別に樂みと云ふ事はないが此の四十人の者が樂みである日々辛苦を共にしてやつて呉れるがナアと夫

より私は和尚に佛骨奉迎には不賛成でも參拜なさる方が然る可しと勧めたれば和尚も七十有餘の老僧の云ふことならとて私の意を容れ其月廿三日の佛骨授受式に出席せられた此日は各宗管長始め各派の僧侶は紫衣金襴の法衣を纏ひ互に美を競ふ中和和尚は平然として獨り麻の法衣を着し身の管長たるを知らざる者の様でした奉迎副使たる妙心寺派前田誠節師式場に臨み暹羅佛教の事狀を説明して暹羅は實に佛教國なり皇室は美を盡し善を盡せりと滔々數千言和尚徐ろに問ふて曰く人民は如何と誠節師曰く人民は甚だ困苦の底に見受たりと和尚曰く妙な佛教だなア誠節師是に於て頓に杜口復た語を繼ぐ能はざりし夫より愈々授受の式を終へ一同起立す某師先づ音頭を取て日本國萬歳と高稱す和尚時に默坐瞑目宛も雙陸の如し然る故にや遂に和唱する者なかりき其日和尙の引率したる八十有餘の雲水が眞心を込めて尊前に誦經せられしは眞に佛骨に對して第一の供養であつたさうです此れ迄全く誦經もなかつたではないですが多くは金員の事のみを議して眞の誦經と云ふことは先づ無つたと云て差支へないです和尚が亡くなつては釋尊も張合がありませんまい然し此後峨山の山に花を咲かせるのは其膝下に在りて修行して居られた雲水衆のやかた一つだ……ナニ詰らん説教や演説するより雲水衆が嚴寒酷暑の別なく市

中に托鉢して影法師を世人に見せらるゝ方が感化力が強い……私も遺憾な事には一度限りの面會でしたが實に舊友の如くに思はれた時々厄介になりたいと云ふと和尚はおれも行くから來て呉れよとの事であつた十月上旬頃は閑暇であるからと約を結び再會を樂み居りしに百三才になる老母が病氣で久敷看病せしも遂に果なくなり此れよりは親とも師とも頼むのは大勢知人の中にも唯峩山和尚一人であると思ひ去月の約を頼みに十月一日六條に歸り和尚の臥病の事も聞き又隣の看病婦が看病に行つたのも聞き且つは驚き且つは心痛致し何は捨て置き御見舞申さんと二日朝支度をなし一寸新聞を見ますと早や峩山老師遷化と記してあり此時こそは胸も破れる計りでした和尚は私より年以下でしたが和尚の禪法を重んぜらるゝと私が宗乘に重きを置くと共に合中したのである將來道を尋ね法を問ふは此人なりと信じたる故天龍寺の山内に草庵を結び和尚に時々法を問ひ一生樂む覺悟であつたのが皆泡沫に歸せしは遺憾千萬の次第ですと追弔の歌を示さる

おしめどもおしみとけぬそあはれなる

嵯峨のあらしの山のもみち葉

一 一夕僧堂に宿し拂曉師に伴はれ滴水禪師の碑などを拜し山内を巡行しつゝ師

は私に告げて曰く吾れは毎朝三時頃から起て經を讀み雲水の參禪を聞き夫より又經を讀んで山内を巡るのだ嵐山の頂きには有明の月が光て居る御室の方から西山を籠めて霞がたなびいて居る京都の人にも此景色が見せたい又行くゝ新空氣を吸引するのが實に心地がよい京の人などは起ると寝るまではこりばかり被ふつて居るが氣の毒な者だと毎朝思ふのよと私は實に有難く思ひました其れから私も拂曉に起ることに致し又老師の弊衣を常に着し玉ふを見て衣類の贅澤も止めましたが其後は人の衣類に美を盡し食物の事なぞ論ずるのを見ると可笑しくなりました是れも全く老師のおかげです

一日私の宅に寄られまして少年時代の談話がありました己れが小僧の時四條の橋を渡りかけると何事かあると見へて大勢人が群集して寸歩も前へ進む事が出来ぬ小供心に何でも人より先に行かぬと駄目だと思ひ人を押しのけて進まんとするも大勢の中だからトテモいけぬそこで一策を案じ出し兩手を人の肩に掛け足を擧げて行け行けと大呼するのださると次第に進み始めた終には一步も勢せずして橋を渡つた何をやるにも無理はいけん無理で目的を達する事はなかゝ難い若し出來たとするもドコにか無理があるから必ず破滅する何事でも同じ事だからなア……

一日處世の方針を尋ねましたら己れが會て丹後に小舟で渡る時ひどい暴風に
 出逢つた舟が大層動搖して乗組の者は皆眞背で泣くやつもあり叫ぶやつもあ
 り念佛題目となか／＼の大騒ぎ船頭始め舟が覆ると謂つて非常の心配だ然し
 こんな時には念佛題目より有り難い者がある舟が左へ傾けば人も亦左の方へ
 行き舟が右に傾けば右に行くから舟は益々危険に陥り吾れと吾が手で死する
 ことがある漁船か又は千石とか云ふ大船なら逃るべき道もあるうが小舟の事
 だから中々危険だ斯る場合には舟を守る方に注意せんといいけん舟が右に傾け
 ば吾は左により又左に傾けば吾は右によつて天色を窺ひ風の通路など見て居
 ると其れは愉快だ念佛や題目より此方が餘程有り難い此んな時はなア皆慌て
 るから遂に舟も覆り身も失ふのだ此位な暴風は世界に日々吹て居るぢや世界
 の大局に居る船頭はシツカリやらぬといけん此頃の大巨なとは吹き倒されて
 ばかり居るのだ……なに慌てるからだ大きな事をやろうと思ふたら心を静か
 に持つてやるが肝心だ慌てる様ぢや碌な事は出来ぬ(中井某の談話)

一浪華に公仙子なる者あり前後其師父を喪ひ頗る哀傷の色あり師之を勵して曰
 くワシも十六の時、最初の義堂師に分れ其後次の泰龍師に分れ今度又た最後の
 滴水師に分れたが其たび毎にシツカリせねばならぬと覺悟して益々道を修め

た今から考ふれば師匠を取られたのが却て幸であつたかと思ふ、あなたも重さ
 なる不幸でお氣の毒だが修業次第で却て幸に轉ずる事が出来るシツカリやり
 なさい

一天龍寺の再建中、時の總理大臣伯爵松方正義、師を方丈に訪ふ大工稻垣某棟梁た
 り時に外庭を過るや師召して正義に會はしむ曰く松方さん此男が今度の棟梁
 だナカ／＼やります賞めて遣つて下さいと正義乃ち座を改めて奨慰す某喜ん
 で師を徳とし彌々工事に勵む

一弔儀葬禮の形式に流るゝや師以て弊となす滴水師遷化の時師乃ち衆に告て曰
 く形式にあらす實情にありと仍て葬送の禮、會者をして敬誠の至情を致さしむ
 權官大族縉紳貴女と雖も一切乗車を禁じ雪中草鞋を穿ち徒歩列に隨ふ世傳へ
 て敬孝の禮に適ふとなせり

一師常に孝道を以て念となす幼時岩倉の里に乳育せらるゝを以て乳母等翁婆の
 來り訪ふことあるや之を待つ亦實父母の如し或時乳婆老師の背を撫しお前さ
 んも大きくなりましたなアと師聲に應じて曰くモウ安心してお呉れ滅多に怪
 我もせぬでな

一師、僧道の衰を慨き來英を養成するを以て自ら任となす故に其子弟を待つや修

道を責るに於て嚴正假すなきも又之を法外に役せず建堂勸化の如き自ら帳を持し往復するに至る得庵鳥尾小爾太看て輕擧となし會下をして行乞せしめよと勸む師之を拒んで曰く馬鹿な事を云なさんな私は本堂位百でも建ると云ふ釋迦でも達摩でも開山でも峩山でも尻からコキ出すやうなエライ坊さんを拵えたいと思つて居るのだもの

一師の曾て大阪に至るや廣瀬幸平を其宅に見る幸平師の望みに就て一物を寄附せんと云ふ師曰く内佛なし幸に寄附せよと幸平乃ち師を促し市内の佛具屋を探がさんとして果さず後天龍に至り見るに内佛あり曰くありますなア……ン其れぢやチツと小さい乃ち幸平を引ききて本堂の焼址を見せしむ曰く幸平さん此處だ此處えマア峩山の内佛だから大きいものはいらぬがザツと十八間四面位で拵えて貰ひたいと幸平呆然遂に之を領す蓋し天龍再建の發端なり

一弟子某新たに天龍に入り始めて僧堂に參す師時に外用の事あり將に出んとして某を顧て曰く急ぐか……イエ今日は一日遊ぶ積りです曰くンンなら愛宕山に登てこい其間にワシも歸るからと瓢然として往く某は言の意外なるを感じたれども遂に遠ふべくもあらず脚絆を副司寮に借り艱關二里登山を了て歸る途次具さに辛酸を嘗めて師の非凡を思ひ奉事參道の心益々決する也歸れば師

既に座に在りて曰く景色がよかつたらう……景色をころか足引摺りて歸つて來ました、ウム其れでこそ僧堂に來た直打がある

一弟子某東に歸らんとして堂下に辭す師之を送る辭し去ること未だ幾歩ならずして師一聲高く呼ぶ某聲に應じて反へり向けば師莞爾として曰く座蒲團を忘れるなよ

一師病床に在り發熱四十度以上代議士某大患を聞き拜趨慰狀して曰く熱高し尊懷異なることなきか師音容自如として曰くイヤ〜峩山はチョツとも變らぬお前も近日東京え行くだらうが何でも誤魔化されて變ることのないやうにして呉れい

一師少時伊深正眼寺に詣り且過に在て座す凜として寸隙なし泰龍和尚窓かに其威儀を覗ひ見て以て奇俊となす曰く此新到坊主他日必ず大機大用を發せん……恐ろしい奴ぢや

一甲子の變天龍寺兵燹に罹り鹿王院義堂屏々京都に召されて諸藩の詰問に答ふ物情騷然弟子等逃れ去る師時に沙彌を以て義堂の門に在り獨り留りて去らず義堂緩急を危ふみ一叱して曰く小僧胡爲れど速に去らざる師斷乎として曰く和尚の在す所は水火も避けませんと義堂之を奇とす

一品川彌次郎超世の器を以て屢々重局に當り上下其風憲を想望す又佛法を信じて師と道交あり其政友白根尊一亦師の道風を仰ぎ謁を期して果さず二人皆師に先だちて世を辭す師之を惜み稱して相許すの士となす

一日客至る師之を座に引き嵐山を指し客を顧みて曰く私しは見らるゝ通り庭に何にも持たぬのだ但此の嵐山を其儘に据えて斯う眺めるのだ人工よりも天然だなア

一往年各山會議の事あるや建仁寺門前車を以て満たさる師時に參暇(執事)たり嵯峨より會に赴くに未だ瀛車あらず仍て草鞋をはき徒歩す會終るや衆皆玄關より乗車し揚々門を出づ師獨り草鞋もて勝手口より出づ一管長あり師の風貌を看て大に呼んで曰く峩山さん嵯峨からは遠方だから人力でないと困るだらう師負けずして曰くおなたは近邊だから御車で往來なさると体裁が宜しい管長赧然として去る後他に語りて曰く峩山は綿服草鞋身に陰徳を積むが口では乾度不陰徳をする男ぢやと

一滴水和尙の在時師黒衣のみを用ひ會て紫衣を着けず一日和尙より贈品到來す包紙に大書して曰くばけの皮一枚と開披すれば紫衣なり師笑て之を領す

一師侍者に語りて曰く己れが伊深から歸て來た時照圓庵の老僧が天龍寺を建て

るのはお前さんだからドウか頼むせと手を合て涙を溢したからナアニ天龍寺位は屁一つこけば立ちますと云ふたが此んな屁はタントこけんわい

一師或時衆に諷示して曰く煤はきの時は己れが便所だけは掃除する座敷の眞中など目立つ處には人が深山寄つて遣つてくれるからなアと蓋し陰徳を教ゆるなり

一師の曾て濃州正眼寺に侍者たるや泰龍和尙能く煮たる者を好まる師乃ち豆腐を一日一夜煮通しにして之を進む曰く今日のはドウです和尙曰く少し水臭いが能く煮たるで旨い

一師一日衆に語りて曰く在家ならば何度東京え出たと云ふと田舎では幅が利く東京では洋行した人はマアゑらいとなる出家では餘り都會に出る者にはロクなどはない出るほどダメになる洋行すれば猶ダメになる

一師示寂の前大衆大阪に行化す唯濃州の俊首座と雲州の耕首座とのみ天龍に在番して師を留護せり師時に劇熱四十度以上兩首座枕憂措く能はず在阪當直讓首座を召還看護せしむ師莞爾として讓首座の歸謁を見て之に問ひたまはく何にしに歸つて來た曰くあなたの御病氣を見舞に參りました師聞て大阪の在衆を念とし讓首座に囑したまはく己れもゑらいが大阪でも皆がゑらからう大阪

の方が大切ぢや己れはモウ大丈夫だから大阪の方の大衆の都合を計て取締して工合ようやつて呉れよと讓首座師の病容を視て逡巡去る能はず師之を呵したまはく馬鹿な奴等だ留護の者もナゼ呼びにやつた容易ならぬ僧侶の大任務に和尚が病氣だからと云て大衆を迷はしては濟まぬサア、讓首座は大阪へ留護の者は留護に各其分に勤てやれと三首座相目して泣然感泣す

一師臥床に在り病劇しく熱昂ふして晝夜寸眠なし侍者亦寢食を廢し看護に疲れて或は睡るむことあり或時火鉢の火赫々として無駄湯沸騰せるを侍者覺えずして在りき師看て注意のため湯々と呼び玉ふ侍者飲湯と誤解し碗に注いで進む師咄聲して其油断を戒しむ

一或人問て曰く世の中が段々と進歩するに隨つて宗教の必要がなくなるでしやう師これに答示して曰く否々人間死の無くなる迄は宗教も必要ぢや

一師や微衷を王法に存し風憲の弛廢を憤ふること深し常に親近に告げて曰く一度臨濟録を陛下の御前で提唱して見たい、どうして大臣のやからに聞かして幾らか道理を教えてやりたい

一自持言行錄高橋健三氏の中に老師が自持居士の病を小田原に訪はれし時の話しあり曰く老師出立の時夫人旅費を呈せんことを諮らる予居士の門人其の儀

に及ばずとなせしに先生居士之を心なきことゝて安んせざるの状あり乃ち師が先生の膳の高く廣く堅牢なるを愛されたれば之に倣ひ製せしめて寄附せんことを乞ひしに先生意を得て自ら脚の繰り方塗り色等の事を指圖せられ小田原に得ずして京都に注文せしが間もなく先生の膳は紀念の遺品として師に贈ることゝなれるぞ悲しきと其の時小田原で出来兼ねたれば已むなく寸法を記して老師に託し京都にて摸製せしむることゝなせしに何分實物を見せず造らせること故如何に間違ひてかペラ棒に大きくなりしとて三十一年六月二十日付師よりの書翰に

(前畧)扱此度之膳十八日出來何でもと半月餘り前より樂居候處托鉢僧持歸り直様一見實に驚入候如何となれば大きく高過ぎ黒ヒカリ過ぎ先づ大佛様の供養膳なれば然り吾輩之麥飯僧には羞入候に付其儘佛具用に直し置候此度之事實に一學問に相成兎角空論の用を不成事實見度を過すは失策之第一生愚古諺に長持枕にならずと注意有之事相忘大失策面白き學問仕喜居候何れ秋來拜眉萬々申上候此十五日より二十一日迄大接心之爲禁酒致居候明後晩は澤山頂戴と樂居候へども是亦度を過す時は後悔の種隨分間々有之將來は少し相心得申度事と存候來る二十三日より大阪拈笑會行

右の話にて大笑可致と存候參禪の餘暇忘想之儘相認候(下略)
斯う云ふ事なりし故後に高橋氏の膳を贈られしなり其の後竹村氏も同一の膳を造らせしことを話され大笑せしが其の時二十三日付にて竹村彌平氏へ送られし書翰に

(前略)先般御來山の砌三條繩手小川テイ婆子御同席中膳の事御申附右品出來候に付托鉢僧に爲持候間受納相成候様添書仕候小生の分も出來已に十八日持歸り一見候に大きく高過ぎて甚だ都合困物に御座候兼て古諺に長持枕にならずと承知の上此度之事は大失策貴下は如何哉先づ奈良の大佛様關の地藏様へでも寄附致度被存候(下略)

老師の書翰いつも戲言中に飄旨あり何れを見るも世の戒め人の心得とならぬはあらず右の書翰は東西自持言行録にも照應したれば唯其の一節を記したるのみ(居士の門人)

一師の遺偈中左の數首の如きは最も誦すべきものと思ふ

碧岩錄開講

換骨靈方歸熱喝 願神妙術在瞋拳 雲深溪靜雨餘曉 千尺碧岩霜葉鮮

同講了

曹源水枯龜峰寂 不識洞庭似昔年 語盡遠山無限話 爐頭枕臂雪餘天

戊戌除夕

咄哉三界輪回客 三百六句過夢中 看破東西南北事 雪花一片轉爐紅

己亥元旦

真人無位弄無功 柳是綠兮花是紅 且喜山門添境致 森羅萬象一春風

小室信夫氏拈香

六十年間如一日 風波相對以關心 涅槃門發知何處 漁笛聲中月色深

峨山和尚を訪ふ

黒田天外

一己亥一月二十日濟門の老古錮由利滴水禪師の示寂せらるゝや余は其逸事を蒐輯せんと欲し普く門下の諸師居士を歴訪し次で橋本峩山師を天龍寺に訪ひて其示教を請ひき時に師は余を座に延き坦懐和夷諄々として語らる余は少時の間早くも其大徳の人を薰化するに服し懷裡恰かも續を挾むが如く欣然として辭し去る

後三寧坂に天田愚庵と語り談峩山師に及ぶ余曰く師と相語る恰かも煦々たる春郊に立て春風に面を吹かるゝが如く別に峩々たる高處も見へずまた峨々たる

る激處も見へず畢究器宇裕大にして那處と摸索する處なしと愚庵掌を抵し曰く能く窺破せり矣と

四月中旬櫻花は嵐山嵯峨を置むの頃再び師を天龍寺に訪ひしが師は其前日錫を飛して濃州に入りしと依て友人と舟を堰川に浮め峽間團々の櫻花を賞し大醉淋漓として歸る六月に至り余は一書を呈して請教の意を致しき其後師は返東を裁して曰く頃日接心法務多しされど二十二日は少間あり相待つべしと因て同日腕車を驅り二條停車場より京鐵に投じ嵯峨驛に着し直ちに師を天龍寺に訪ふ

前日より早朝にかけての降雨は漸くやみたるも雨雲尙は低く蔽ひて境内の綠樹は青漠々恰も杜宇啼破萬山青の概あり刺を通ずる間もなく一僧出來りて曰く今お噂をしてありましたと因て導びかれて座に入る

師例の如く溫顔坐を與へて相語る時に湘簾は波紋を織り机邊には杜鵑花紫白妍を競ふ師曰く此ようなもの前はすかなんだが矢つぱり眼の食物も入用ぢや余曰くやつぱりお年がいつたのでせう師曰くまあそうぢや余曰く只今僧堂には何人はぞお出で、すか師曰く七十はぞ居る何でも日本のつふれる方に働いて居る者が善い方向ふように此れ等の雲衲を育てゝゐるので……我々宗門

は世に擧つてやらすといふ譯にはいかんがちと善い者を育てゝおかんと……ひゝ接心は毎月やつて大接心といふのを三週間やるがこの大接心こそ我々が佛祖の骨髓の萬分の一でもと奮發する時である

うむ私は京の生れぢやが未だ私が腹の中にいる時から親共が生れた子が男であつたら坊主にすると定ておいたのぢやそうで……それが私や丑ぢやでな在家で丑のものは家を突こかすと云ふので其れで坊主にしたのぢや

それで京都の飯は何程も食はずナニ岩倉の方へ子に預けられたのだ、うむ坊主になつたのは五才の年で其時師匠の義堂は雲水の世話しておつた、こりや豪傑だつた獨園滴水の横面ハツた方で……うむ滴水に取つては兄分で師匠で……やつぱり義堂について法を學んだのだ……こりや明治元年に五十二で死んだ……そりや大きなこといふて居つた天龍寺再建でもあれが居つたらまだ大きなことに建てるのぢやつたがな

機鋒は鋭い滴水を藪へ叩きこんだ方で面白い和尚ぢやつたな平日は庭園など掃除せず捨て置いて昔は五節句てやかましく云ふたものぢやが其節句の朝になると世話方の役人が羽織袴で出て來るので俄かにやかましく云ふて掃除さす、そこで私等はナマけ者の節句働らきといふは此れぢやと不平たらしくで

掃除をしながら世間の利口上下を着て大小を佩す鹿王の阿呆箒をかついで掃除を致すと云ふてると後ろの椽端に義堂が聞ておつて馬鹿ツと一喝しよつたアハ、なに鹿王と云ふは義堂か鹿王院にあつたからだ

それで義堂は町人相手が嫌ひでいつも来るのは公卿大名武士などだ維新前のことぢやが一日一室には薩州の岩下中村などが来てゐる庭を隔て、彦根の貫名が居る、あの家老のな……そこで和尚が私に云ふには彼處におるのと此處におるのと犬と猿せい……

また或時に云ふには天龍寺は後醍醐天皇にも歸依になり足利にも歸依になりそれで天下の大平を計る坊主に敵も味方もあるのぢやなど

私が十六の時に此和尚が没くなつて其れから美濃伊深の正眼寺に泰龍和尚といふについた、こりや實に名の如くゆたかでキツイ方でどうもあの人等が藝といふものは實に責任を帯ておつた今死ぬと云ふ際に大衆に遺誠を説いた聞へんような微かな聲ぢやが切口上で……あれで坊主の本分を盡しておる、そこに十三年おつて其れから此處へ歸つて滴水についた

余問ふ過日の御談話に和尚が滴水禪師に參禪して契はず夫が爲め禪師に鳩尾を四度も蹴られて今でも冬には疼痛むといふことでしたし其他古來の高僧等

にも自ら臂を断ち或は左脚を逼折せられ其他惡打痛棒は常のようですがあれ程にせねば道が傳へられませぬか師曰く上士は恨につく中士は徳につく下士は勢につくこりや世の事でもそうだな、あの場處まで至らぬと向上の事を傳へることは出来ぬので……段々經驗するはどあそこになる……それでなく只千七百則もある公案を一々調べんならんようでは眞に駄目である

談は少しく國事に度り師は慨して曰く家でしょうのないものは家醜を揚げにゆく、あれをどうかせんといかん……一家の思ひをなして國をやらんと戦争で少しく勝ても商法でめちやくゝになる其れでいつか松方にそういふたら痛い處へ鍼をさゝれたと云ひおつた……私の處などは一家と云ふより一人といふ方でこの僧堂は……

かく云ひつゝ師は自ら起て簾を揚げしが雨後の山色青更に青く眼界頗に爽然たり余曰くこの眺望は實に結構でございますな師曰くよいぢやろう

折から一客ありまた座に入る師曰く此間運動に弓を彎ひたらチト肩が痛いよ、うぢや、そこで弓で来たから弓で療治しようと思ふて頻りに藪弓をやつたがドウもいかん余問ふ恭は御好だそうでございますな師曰く恭は止たはうだ恭も強けりやよいが

師は自ら養老酒を酌で余と客に與へ曰くこれは此間美濃へいつた土産だ、こゝにいふ瀑布が落ちようものなら直に僧堂を其邊に移してしまふ、そうして托鉢して呉れな、なら雲粥と一しよに養老酒を飲んでゐるだ、余曰く酒はお好きだ、さうでござります、な師曰く以前は随分飲だから美濃から傳言がある毎にいつも酒を節しいと言ふて来る、其れが雲水などの時は一度酒に逢つたら今度は何時逢れるといふ期限が分らぬから、其れで乞食根性……ひがみ根性で飲むので、な然しもう何時でも飲れると思へば、さう飲みたくもなく、又隱居(滴水)の死後大に節することにした、余曰くそれでは以前は一升以上も師曰くモツと……然しもう此頃のようにでは傳言もしよまいアハハ、

談は白隱禪師に及びしに師曰く白隱禪師は實に我國禪門中興の豪傑ぢやソコに掛てゐるのは白隱の畫いた遠磨ぢや余即ち起て之を拜するに筆力豪放にして勿々數筆よく大師の神采を發揮し上に「いつ見ても」と書し之に白隱惠鶴の二字を捺す、只に其畫の稀品なるのみならず「いつ見ても」の五字豈に無限の神趣無限の烟波ならずや、余は敬仰之を久ふす

師は今日は緩つくりしてゆけど懸ころに止められしも少しく所用あり午後四時頃同寺を辭して歸路につけり。

一十一月念九日余は飄然三たび峩山和尚を嵯峨天龍寺僧堂に訪ふ時方に午前九時にして和尚の聲は朝々として戶外に徹す、乃ち靜かに音訪へば一僧出來りて曰く和尚正に提唱中なり先づ此方へと余は躍然として僧堂に入れば和尚は高壇に坐し、恰かも碧巖五十四則雲門却展の章を提唱し、雲水居士の侍坐諦聽する者八十餘人、余も靜かに一僧の傍らにつき讓られて碧巖を分觀し、諦聽せしが和尚の聲は高明豪爽にして、縱說横說圓融無礙、其几案一下眉昂く、眼輝き、意氣堂々威風凜々、恰かも雲門の所謂氣宇如王の大機を述るに至つては、聽徒が毛髮爪甲の末に至るまで一種の電氣……真勇の氣の吹入りて顫動するを覺ゆ、而して竊かに和尚の氣色を窺へば、樂ひが如く激するが如く撫するが如く喝するが如く、恰かも獅子王の其兒を弄するの概あり、二十分許にて提唱終り、和尚は壇を下り侍者を從へて内に入り、雲水は一齊に飄經一回、而して散す、余は尙ほ座に據て、嗒然たる少許一僧出來りて曰く、此方へと乃ち和尚の室に入れば、和尚は黒衣を披きながら座につき、例の温顔もて余に接し曰く、うむ、大分暫らく逢はん、ようじやな、サアそれへと座を與へぬ

此に至つては和尚も只一圓の和氣のみにて、彼の登壇の際の威風凜々近づくべからざるの概あるに類せず、曰く天龍寺も滿三年かゝつて漸く出來上つた、随分

他ではこういふことで多少とたぐのあるものぢやが幸ひ吾禰の方はそんなこともなく一昨日天龍寺で(僧堂と内部は別になり居ると)饗應と云ふから豆腐位喰せることかと思ふて行たら大分馳走して呉れた寄附してくれた重なのは品川、北垣、鳥尾、伊庭、廣瀬其他大分あるが再建費用は先づ四萬五千圓程だ。うむ他寺でも随分再建せんならん處もあるが之がなか／＼面倒なもので何をいふにも生命から二番目の金を寄附して貰ふのぢやからな夫れをして貰ふに ついては先づ内部から改革してかゝらねばならぬ假令ば戦争をするとなれば先づ平時とは違ひ費用も節する妾のあるものは妾に暇を出す女房にも水杯して別れる而して吾生命さへ捨てかゝれば其人々應分の働らさが出来る其れを平日のやうに費用も節しねば妾も置て居るは水杯もせぬはととなると到底戦に出ても格別の働らきをすることは出来ぬ

此の再建といへば坊主に取つて一つの戦争ぢや、そこで再建に取かゝる前に吾禰は先づ内部を改革して戦時の心得とし假令何年かゝるが再建の出来るまでは食物につき小言など一切言はぬ、そうして草鞋がけて彼方此方奔走して寄附を頼む、そうすると又人も寄附してくれるぢや……然し人間は弱いものでそう覺悟して居ても長くなると又同じ麥飯でも温たかいのを喰たいといふ氣にな

るぢやアハ、それで此寺も先づ再建は出来たが來年の遠忌まではまだ戦時の心得を解かぬつもりだ……世間では往々衣食とも平時の通りにして、そして寄附金を募ろうとする其れで思ふようにやることも出来ず従つて紛擾が起ることがあるのだと和尚の此言は深く人情の機微を穿ち成敗の分るゝ處を明にす殊に伽藍再建など企つる僧侶の好摸範となすべし

和尚また曰くまわ此寺を再建したについて一番の大出来は工事に關して少しも雲水を使用せなんだことぢや然し夫でも法堂を前にひいたので掃除をする處がふへたと小言をいふて居るのだと侍僧を顧み打ち笑ふ

會ま一客あり和尚は之に接せんとして室を出去りしかば余は徐ろに椽端に立出しが小春日和といふべき日光照々として嵐山は樹間淡煙を含み畫ける如く前に横はり庭前一樹の殘楓は爛紅恰も燃るが如し不圖眼を注げば庭の一隅に大なる撥笠を被れる狸の陶器を安んず余は面白きものと思ひ庭下駄を穿ち箒目清き白砂を躡みて近づき見つ又坐に復りて床に懸たる雲門大師外一禪師の掛幅を拜し再び嗒然として嵐山に對するの時和尚は入り來りて曰くやあ失禮した實は支那布教について前々から周旋する人が來たので之より談は支那布教問題に入る

余問ふて曰く和尙親ら支那へ御渡航なさるやうに聞きまされたが果してそう
御座りますか和尙曰くいや吾禰は初めから行かぬつもりぢや總督府から禰宗
に於て布教されるなら年々千圓内外の金は支辨するといふから夫れで誰か渡
航するものがないかと周旋して見たが一向行こふといふものがないそこで吾
禰も餘り不甲斐ないと思ふて一層自ら行て見ようかと思つたが此れは懸意な
者があつて日本の事はどうするのかと頻りに忠告して呉れたので吾禰も大に
閉口した

尤もこゝで此れならばといふ法種さへ残せば峩山一己の身体は何處へ行て倒
死しても關はんが法種を日本に残さぬ中はツッ吾禰も行くことは出来ぬ其れ
で此種といふものが何時でも蒔けると云ふものでない百姓の種蒔は彼岸に定
つてゐるが吾禰の法種蒔も同様でこゝ十四五年は吾禰の彼岸ぢやからこゝで
十分やつて置ねばならぬ然し夫どもタツて吾禰に行けといふなら行かんこと
もないが其時は此僧堂に居る雲水八十餘人を引率れて行く尤も八十餘人の中
いろゝの事情もあつて皆が皆といふわけにも行くまいから先づ少く見積
つても五十餘人は引率れて彼國で此方の法種蒔をしながら布教をしてもよい
何も日本でなければ禰を學べぬと云ふのでないから何處でやつてもよいが吾

禰一人雲水を捨てゝ行くのなら眞平だ……うひそれで其後もいろゝ談話が
あつたが先づ八幡圓福寺の宗般和尙が奮つて出かけることになつた

うひ星には一度東京で出逢ふた丁度吾禰が宿つてゐる處から六七丁距つた家
で一度逢ひたいといふから行つたが星といふ男はいろゝ細かいことまで知
つとる男で字義のことまで詳しく聞て困つたが丁度河合(清丸)が傍にゐたから
河合の方へ振向けた……うひ星なぞが何づれ是から國事を擔當するのである
から今の中にちと腹をこしらへて置けば大きによいと思ふ其れで星も少し暇
になつたら是非共嵯峨へ來ると云つて居つた

うひ某國との事情もそないに迫つてゐるかね……そうか……然し日本も今こ
こでもう一遍やつて置く方がいゝだろう

なに庭にある狸の陶器あれは醍醐にあつたのを他の者が摸造してそして裏に
字を書てくれと云ふので書てやつたから其れで吾禰の處へも一つ呉れたのだ
うひあれで燈籠だよ

あゝ左様か禰をやると身体が壯健になるだろう……夫で何事をするにも自在
を得るからね何でも人間は隨處主となるといふことを解せねばならぬ隨處主
となる者でない事業でも何でもすることが出来ぬ……オ、そうぢや

和尚は余が酒を嗜むを知りてや侍僧に命じ早くも齋を出さしめ共に杯を擧げて且つ飲み且つ語りて曰くこれが托鉢した錢で買たのでない吾禿が他家から貰つたのだから遠慮せず飲んでおくれ吾禿も再建の事もあらまし方がついたら一盃旨い酒を飲ふと楽しんでゐたのだと其坦懐客を愛する此の如し齋飯終り既に正午を過しを以て余は厚く和尚に謝して僧堂を出て更に一僧に請ひて本堂を一見しつ終つて義堂和尚の法華塚並に滴水禪師の墓に詣で回つて法堂に入る是また今回再建せしものにて堂内寥廓として中央に佛像を安んず而して此天井は畫家鈴木松年氏が其奔放なる健筆を奮ひ一大天龍を畫くべき處にして此畫龍に就ては和尚と松年氏との間に於て一大佳話の傳ふべきあり請ふ之を叙せん

初め和尚は松年の畫名を聞くや自ら其邸に赴き天井の龍を描かんとことを請ふ曰く子に非ずんば之を描く者なし若し子にして之を許さずんば吾禿は子の許すまで幾回にても邸を叩かんと和尚の高徳盛名を以て此言をなす松年の喜び知るべし依て欣然として之を諾す其後松年和尚とは一再往復す一日和尚また松年を訪ひ曰く潤筆の價幾許ぞ松年曰く三千金和尚曰く諾すされど吾禿佛家巨資なく一時清贈する能はざるも請ふ錫を飛して之を辨せんと松年躊躇思ふ

所あり和尚の正に袖を拂ふて去らんとするを見て急に之を止め曰く和尚暫らく待てと乃ち筆を走らし一券を書して之を送る和尚以爲らく松年或は之を畫くの期日を約するならんと手に接して之を見れば曰く畫料三千圓右槌に受取候也と蓋し松年は慨然三千金の證券を贈り無料を以て之を畫かんとするなり和尚大に喜ぶ松年曰く吾和尚の爲に既に法堂の龍を畫く吾もまた和尚に請ふ所あり和尚曰く什麼ぞ松年曰く龍を畫くべき天井大さ二百疊其筆硯また巨大ならざるべからず我新に一巨硯を製すれば和尚を初め雲水の大衆誦經の傍ら硯墨を磨し以て巨硯に灑げ和尚曰く諾す松年曰く既に揮毫を終らば願くは其の巨硯を本堂の邊に立て以て紀念の碑となすべし和尚宜しく爲めに數字を題せよ和尚曰く諾すと約成りて飄然として去る

松年氏が三千金の證券を贈り無料を以て法堂の龍を畫くと聞くや富商中井某は其巨硯の資を辨せんと請ひ或は墨汁を磨すべしといひ其舉を賛する者續々として出づ而して松年氏は目下揮毫につき經營慘憺中にあり余が和尚を訪ふの前數日松年氏は余と同じく天龍寺に赴くを約しき而して余は興に乗せるまゝ獨り先んじたるが今や天井を仰視してそゝろに揮毫の容易ならざるを思ひまた松年氏の豪膽健筆は既に其困難を打破して二百疊の大天井間もなく雲烟

迷離天龍騰躍の大作を現すべきを想ひ佇立凝望之を久ふす
余や屢々和尚の教誨を受け而して松年氏とは夙に往來親密なるを以て特に書
して以て後世書史の料に供せんとす豈に一時の走筆と謂はんや——乃ち一僧
に辭して京に歸る

峨山老師遷化紀聞

明治三十三年九月十九日二十日の頃は師容既に違例にして肝臓の痛苦劇甚な
りしならむとは後よりぞ推知せられける
十九日は例年の通り彼岸中雲水の大坂托鉢に行く日なれば老師は其朝自ら起
きて衆を促し早く起きよと呼びつゝ起こしに廻られしと云へど痛みは此前よ
りありしならむ
斯くて雲水の出發後は病痛更に劇しかりければ醫を招きて手當をなし其後兩
三日は快氣にて平日の如く話されし日もあり一同喜び居りしとぞ
然るに二十六七日となり病障肺部に及び遂に重患に陥りしは實に人天の一大
不幸と云ふべし而かも太漸に及ぶ迄十日計りの間或は肺炎の症も時に減退し
て輕快に向ふの狀あり殊には老師の體質本來岩丈なるを以て介護者は勿論清

野笠原猪子、緒方、今居等の諸名醫に至る迄尙は幾分か快復の望を存したりき此
月三十日即ち臨終の前夜迄も神心は凜として變らず醫に對しては其の退て休
眠せんとを勧め在側の僧には某氏法事の讀經を命ずる等其人其事を誤らず醫
も此の調子なれば急變なかるべしとの意見なりしとぞ

翌十月一日は實に是れ老師入寂の日なり老師は此朝を以て左右に命じ南枕西
向の臥床を滌えしめ改て頭北面西にして臥し玉へり又被られし青毛氈を洗は
んと侍者の請へるを制して「モウ一日だ」とあり斯くて臨終の威儀を正し最後に
「モウ何にも云はまいなア」の一言を遺したるまゝ氣息肱の如くなり玉へり

是より先醫士有志等は師の辭し玉ふを強いて二人の看護婦を附けたりしが茲
に至りて一切病床の面會を謝絶し二人をして來訪者に戒告せしむ

一日正午前伊庭子大阪より到り食後折りを見て將に謁せんとす尋で伊庭子夫
人も亦醫士を伴ひて來り先づ入りて病床に就き師容を訪んとす看護婦安眠中
と思ひ發聲を否めり夫人聽かず新たに入りて容子の異なるを思ふや怪んで表
山様和尚様と連呼すれども應なし看護婦初めて驚き醫馳せて注射するも又驗
なし蓋し師は既に眠るが如くにして大寂定中に歸入せられしなり
遠近道故の僧俗、訃を聞て皆床邊に集る老師の實兄橋本伊兵衛氏東京より來着

示寂に後るゝこと僅に二時間なり遺骸は平常の麻衣麻袈裟を着け跏趺の姿儀を以て木床上に安置せしが翌二日午後に至り式の如く納棺三日午後之を本殿に移し大卓上に香花燈明阿伽を供し雲帟凡そ二十名組々交も坐して讀經す居士信士の類亦後邊に座して徹夜せし者あり

四日午前十時點心其れより參詣人に齋をすゝめ同十一時半鳴鐘一山出頭して楞嚴座誦回向をなす各宗各派の諸師并に親族參詣人一同の焼香あり了りて出棺す嗚呼當春の大遠忌に導師たりし大兵の老師は今や見るべからず小兵の龍淵和尚の焼香を受け盡碎成功せし大建築の本殿を委棄し去る無限の感に打たれて茫然たらざる者なし

高聲に呼上げつる行列の順次は先づ法身幡に始まり次に引磬次に耕雲老大師龍淵和尚には侍香侍衣の僧隨へり次に香爐次に尊牌には新示寂 本派管長 峯山和尚大禪師と記し鹿王院の昌元藏主老師の法孫を以て之を撃げ茶盞湯盞杖拂鉢盂等左右に具す次に龜は全生庵牧田寒山寺全方外和尚上座等法縁深き者二十二名にて八名づゝ交代に之を擔ぎ其左右は講本と法衣なり次に侍香朱蓋侍衣の僧行き次に喪主は鹿王院住職謙堂東堂老師の法子たるが故に打立つべきの處臥病中に付き玄義上首座代りて列に在り嗚呼此の玄義は曾て老師に得

度せられたる好因縁を以て今此の一大事後の喪主に代りたりき次に天龍寺派親族道生會員東京信徒拈笑會員大阪信徒公同會員神戸信徒次に京都及各地信徒嵯峨信徒等逐次練り進む行儀整々肅然として觀るべき也

斯日や葬龜を道途に拜する者亦頗る多く殊に茶毘所龍安寺に至る迄里餘の間一人の乗車する者なかりしは固より老徳の然らしむる所他の通般の葬儀とは全く其觀を異にせり龍安火葬場に着するや衆僧楞嚴呪五の段回向あり會葬者一同焼香し終る天龍寺に戻るもあり休憩所に入るもあり落心して宿所に就くもあり衆僧は歸山の後安牌諸經大悲咒の回向をなす

老師曾て伊庭貞剛子と語る曰く獨園和尚の遷化は炎天酷熱滴水和尚の遷化は寒威嚴烈其人の遷化は實に其人を自ら評し得たりと老師遷化の後伊庭子亦人に語つて曰く氣候を以て二徳を評したる老師其人の遷化は恰かも是れ彼岸の節にして寒暑の中を得たり願ふに老師は二徳の長所を兼有する者と時に河村善益子亦坐にあり語を繼で曰く吾れ曾て老師に向つて云ふ師は獨園の如く又滴水に似たり二者を併せたるの人なりと今伊庭子の談を聽くに其の氣韻の天候と合ふに至ては實に妙なりと

嶽山逸話

四十一

嶽山逸話

明治三十四年十一月十五日印刷
明治三十四年十一月廿五日發行

非賣品

編輯者兼
發行者
深山一郎
東京市神田區雉子町三十二番地

印刷者
飯村辰之助
東京市神田區雉子町三十四番地

印刷所
成章堂活版部
東京市神田區雉子町三十四番地

116
160

